

第三章 アマゾン

アマゾン特有のスコールは、一向に勢力の衰える気配を見せない。

ヘンリーは、またも直前で水を差されたといういらだちと、ようやくここまで追いつめたという達成感、陶醉感のないまぜになった気持ちに、一種の眩暈めまいすら感じていた。

頭上に繁茂する枝葉の重なりも、これほど激しい雨を除けるにはたいした役に立たない。彼は腰にしつかり巻き付いた完全防水性ポーチのファスナーを開けると、折り畳んで入れてあった野球帽を取り出した。かぶると何とか目の前に落ちてくる雨滴を遮ることができた。

ポーチを閉じる前に、奥に突っ込んである小型拳銃を確認した。いつでも取り出せるようにしておかねば。

樹の上で体勢を立て直し、ほっと一息つくくと、顔にかかった水気を両手で拭った。

……ノーマンはどうしているだろう。彼のつかまつていた細く小さな樹には葉も茂っておらず、雨を避ける手だてはない。雨が早く止やむことを祈るしかないはずだ。

いつしか頭痛は消え去っていた。状況が把握できたことで、持ち前の冷静さを取り戻せたからだろう。とはいえ置かれた状況は、どう控えめにみても絶望的であることに変わりはないのだが。

それでもヘンリーは、自分がこの状況をまったく嘆いていないことに気づいていた。なぜなら――。

なぜなら、ついにノーマン・グリーンウッドとの再会を果たすことができたから。ノーマンをここまで追いつめることができたから。

密林の奥深く、誰も知らない場所で濁流の中に放り出された二人。奇跡的にも命は助かったが、いつこの命綱ともいうべき樹木が折れ、川に飲み込まれないとも限らない。十分後か、一時間後か。

そうであっても自分は構わないと思う。

ただ、復讐を全うすることができるなら、もうこの命など惜しくはない。笑って大自然の力に身をゆだねてもいい。

だから雨よ。早く止んでくれ。

今日こそ決着をつけさせてくれ。

彼は再びポーチを開けて拳銃を取り出した。小型ながら黒光りする銃身に、彼は緊張と興奮が体の中から湧いてくるのを感じた。

雨に煙る水面。その向こう側、わずか五メートル先にノーマンは、いる。長年の仇のいるあたりに彼は銃口を向けた。

いつもいいところで逃げられてばかりだったが、貴公子さんよ、これで物語はジ・エンドだ。

思い返せば、ニューヨークで奴を見失って以来、ここまで距離を詰めるのに五年の年月を要した。

ヘンリーの脳裏には、ここに至るまでの道のりが、知らず知らずのうちに思い出されていた。

あの日――。

結婚式の真っ最中に暴漢の襲撃を受け、ノーマンは重傷を負った。

イギリス出身の成り上がりで血も涙もない冷血漢。新進気鋭の流通界のプリンスにして独裁的企業家。ノーマンに対しては、賞賛の声に匹敵するぐらい、その命を狙う人間も多かったことだろう。病院で身動きがとれないのを好機とばかり、奴にとどめを刺そうとする第二、第三の刺客出現の噂が当時しきりに飛び交った。こうなつては、フランクやティムがいくら有能なボディガードであつたとしても、到底防ぎきれものではない。会社は万全の警備をニューヨーク市警に要請した。警察側も式

場での失態をこれ以上繰り返したくないため、望むところであった。

病院はノーマン一人のために貸し切り状態になった。入院していた患者たちは全員他の場所へと転院させられた。そのため院内はしんと静まりかえり、警官の足音ばかり目立つようになっていた。

当事者たちの緊張をよそに、マスコミは連日、事件の特集を派手派手しく組み、市民の関心をこれでもかと煽り立てた。

皮肉なことに、狙撃犯フレッド・モースはヒーローに祭り上げられた。警察はフレッドが現場で残した言い分を発表してはいなかったが、どの新聞や雑誌もほぼ正確に彼の犯行動機を言い当てていた。もちろん従来どおり、表だったグリーンウッド批判はない。しかしながらその分、フレッドを英雄化する方向へと皆の反応は向かった。フレッドには亡くなった息子の他にもう一人、娘がいたらしい。ある週刊誌の記事によれば、通っていた美術学校を辞め、フレッドの店を継ぎ、一人で切り盛りしているという。これがまた市民の涙を誘い、店は連日大入り満員の活況だというのだ。

ああ、ここにも自分と同じ立場の者がいる。ヘンリーは胸を打たれた。

ノーマンのせいで父母と兄を死に追いやられた彼女の胸中はいかばかりだろう。美術の道を断念し、父親の意志を継いで、不慣れな仕事に身を投じた彼女の想いに心を馳せると、ヘンリーは涙を禁じ得なかった。

翌日彼は娘に対して、匿名で少くない額を寄付して送った。『美術への志を忘れないでください。時間はいつの日か貴女に味方するでしょう』との一言を添えて。

ノーマンの容態は、日々快方に向かっていた。

凶弾はわずかに急所を逸<sup>そ</sup>れていた。治癒に時間はかかるが、傷も後遺症も残らないだろうという。ノーマンの悪運の強さに、ヘンリーは今更ながら舌を巻いた。

——いや、そうでないと困る。まだ死んでもらっては困るのだ。奴を殺すのは自分だ。奴は自分だけの獲物なのだ。誰にも渡すものか。

ヘンリーはノーマンの病床に日参した。ノーマンの決濟や指示を要する書類や計画が山積していたからだ。だが入院後、ノーマンはなぜか人が変わったように寡黙になった。

担ぎ込まれた時こそ、一時的な人事不省に陥ったが、意識を取り戻してからは言葉遣いや思考に一切の乱れはなかった。事件に対しても感想を述べるといふ情緒的な

ところは見られず、ただ事後処理にてきばきと指示を發するだけだった。ところが――。

ある時を契機に、ノーマンに変化が起こった。

ヘンリーの記憶では、ある週刊誌を手にした時だったように思う。巻頭のグラビアページがすべてエレノアの写真で埋め尽くされたその雑誌は、はかな美しきヒロインの短くも儂き生涯”と銘打って、彼女が生まれてから今日に至るまでの人生を年表形式で特集していた。

ニューヨーク社交界の華、エレノア・クイン。

誕生日パーティーで、得意げにダンスを披露する幼い日の彼女。

愛馬を亡くして涙にくれる彼女。

高校のデイベート大会にて、大きく瞳を開き、相手を論破しようと意気込んでいる彼女。

そして、マスコミ向けの婚約会見ではにかむ彼女。

どの写真にもエレノアらしい愛嬌と美しさがあり、生き生きとした息吹を感じとることができた。

だが、特集記事の最大の売りは、ラストに掲載された一枚の写真だった。

真っ赤に染まった純白のウエディングドレス。

おそらく斜め上方の記者席から撮影されたと思われるその写真は、エレノアの視線をまともに捉えていた。

その見開きカラー写真には、一切のコメントが添えら

れていなかった。どのような形容詞も、彼女の最期を飾るには陳腐であると判断されたのだろう。

エレノアの顔は、笑っているようでもあり、怒っているようでもあった。なおかつ悲しんでいるようにも、哀れんでいるようにも見えた。

事切れる直前、まさに命の炎が消えんとする瞬間が、そこには刻まれていた。この世のものとは思えないエレノアの最期の美しさを前にしては、どのような肖像画も色褪せてしまう。

事実、この号の週刊誌は驚異的な発行部数となった。出版社には追加注文が殺到し、翌週に特別増刊号を発行することで対処したが、それもまた爆発的な売り上げを記録したことは言うまでもない。

「……社長？」

ヘンリーはメモ帳から顔を上げた。

午前中の病室。窓辺にはいつもと変わらない日差しが降り注いでいる。ヘンリーは窓際の椅子に腰掛け、上半身だけ起こしたノーマンの指示を機械的に書き付けている最中だった。ノーマンの声がふいに途切れたのである。「どうかしましたか？」

重ねての問いかけにも返事がない。ヘンリーは不審に思い、椅子から腰を上げて、相手のそばに近寄った。

「ん？ ああ済まない」

ノーマンは突然我に返ると、拡げていた週刊誌をあわてて閉じた。その様子があまりにノーマンらしくなかった。すばやく目を走らせると、拡げられていたペー  
ジが、エレノアの最期の写真であることが判った。

「ハンス。今日はこのへんで終わりにしよう」

「ご気分がすぐれませんか？」

「ああ……」

あとはもう会話にならなかった。ノーマンはどこか上の空で、ヘンリーが部屋を後にするまで、視線は窓の外に向けられたままだった。

その翌日――。

ノーマンは病院から忽然と姿を消した。

警察は大いにあわてふためいた。すぐに病院を含む区画に非常線が張られたが、ノーマンの姿を見つげるところか、痕跡さえ発見することができなかつた。

当初警察は誘拐の線で捜査を開始した。しかし病室には争った形跡もなく、ボディガードの二人の姿も同時に見えなくなったことから、自らの意志で病院を抜け出したのではないかという見方もなされた。

ヘンリーが社長消失の報に触れたのは、会議室で数人の部下と今後の方針を打ち合わせている最中だった。

「しまった！」

思わず口をついて出た言葉に、周囲の部下たちは一様に首を傾げた。

転がるように駆けつけた病室には、めぼしいものは何も残っていないかった。ひよつとして自分への指示書などが……。一縷の望みを抱いて、枕元に積まれた新聞や週刊誌などを開いてみたが、そんなものは影も形もなかった。ただ昨日食い入るように見つめていた雑誌だけが見たらなかつた。

何ごとにも計算ずくで行動するノーマンのこと。いざれ秘書の自分には連絡をしてくるはず。そうでなければならぬ。でなければ会社は立ちいかぬ。

ノーマンが病院を抜け出す手はずを整えたのは、おそらくイギリス時代から影となつて彼を支えていた“組織”なのだろう。あれだけ水際だった手並みは他の誰にもできるものではない。

ベッドから動けないノーマンに危うさを感じ、”組織”は一時的に彼を安全な場所に移した——。そう考えるのがもつとも妥当ではないか。ただ会社を放り出していった点だけが腑に落ちないが……。

もやもやとした気持ちのまま、ヘンリーはノーマンからの連絡を待った。しかし一週間が過ぎ、二週間が過ぎても何の音沙汰もない。イギリスにいるノーマンの父親

イアンに電話でただしてみたところ、彼も息子の消失に  
関しては、ひたすら困惑していることだけが、ひしひし  
と伝わってきた。

「君、マグワイア君といったな……。ノーマンには幼少  
の頃より帝王学を徹底的に叩き込んできた。流通業界の  
王となるべく育ててきたつもりだ。アイツも三十六歳。  
考えもなく行動するような若造ではない。ましてやこれ  
から世界に打って出ようとしていた矢先……」

ヘンリーは気になって疑問を父親にぶつけた。

「フィアンセをあのような形で亡くされたことが影響し  
ているのでは？」

すると弱々しかかったイアンの口調が激しさを含み、  
「バカなことを言うな！ 花嫁の代わりなどいくらでも  
いるではないか。エレノアには気の毒だったが、凶弾に  
倒れるような運の弱い女に用はない」

怒鳴りつけられたヘンリーは思わず受話器から耳を離  
した。しかしイアンの言い分はもつともだ。いやもちろ  
ん常軌を逸した考え方だが、あのノーマンならばイア  
ンと同じように考え、処理することだろう。

まさにこの父親にしてあの子供あり。彼らは昔も今も  
全く変わらない。

ヘンリーが受話器を持ったまま返答に窮していると、  
納得したと思ったのだろう、イアンの声は再び気弱な色

を帯び、

「知ってのことだろうが、私はすっかり足腰が弱り、一線から退いた。私が残したグリーンウッド帝国の版図をノーマンがどこまで拡げてくれるか、それだけが老後の唯一の楽しみなのだよ。なのに……」

アイツからの連絡がないのは、きつと悪意ある連中に拉致されたとみて良かろう。私も独自のルートで探しているが、未だに行方がしれない。犯行声明も身代金の要求もない。私には理解不能な事態だ……」

独自のルート——。まさしく“組織”のことだ。するとノーマンの失踪に“組織”はタッチしていないのか？別の何者かに連れ去られたというのか？

イアンは再び語りかけてきた。

「マグワイア君。君のことは以前からノーマンに聞いておる。ひどく優秀なイギリス青年だとな。どうかよろしく頼む。ノーマンを助けてやってくれ」

最後は涙声になっていた。ヘンリーは複雑な思いを抱いたまま受話器を置いた。あのイアン・グリーンウッドが、泣いて彼に「頼む」と言ったのである。

もし彼が「ノーマンは死んだよ」と告げたら、イアンは嘆き悲しむだろう。へたをすれば命取りになるかもしれない。ヘンリーの父母と姉の直接の仇はノーマンだが、育てたイアンにも責任の一端はある。苦しみの先の死こ

そ、イアンのような男の最期にふさわしい。でなければ、この世は闇だ。

二週間後、ヘンリーの望み通り、イアンは苦悶のうちに死んだ。その二日前、イギリスの新聞に『ノーマン死亡が濃厚』と報じられたことが遠因のようだ。もつともこの記事は根も葉もない噂に過ぎなかったのだが、イアンを昏倒させるには十分だった。彼は倒れた後、一度も意識が戻ることなく、この世を去ったという。

噂の源はヘンリーではない。訃報に触れたとき、なるほどそういう手もあったなと思ったほどである。ひよつとすると、ヘンリーと同程度の悪意の持ち主なんて、ざらにいるのかもしれない。

警察もFBIも当てにならないと踏んだヘンリーは、独自の捜査を始めた。多数の私立探偵を雇い、アメリカだけでなく、世界中に捜索の網を張った。ただし探す対象はノーマン・グリーンウッドではない。フランク、そしてティムである。誰も消えたボディガードのことなど眼中にないようだが、ヘンリーはそこに着目した。著名人のノーマンは拉致されているにせよ、しないにせよ、動けば即刻、情報が入ってくるはず。それがないとすれば少なくとも傷が癒えるまで人目に付かない場所にい

るのだろうか。フランクとティムがノーマンと同時に消息を絶ったということは、二人は今こそノーマンの手足と成って身の回りの世話をしているに違いない。そう考えるのが自然だ。

ヘンリーは忍耐強く二人を捜し続けた。

フランクにしろティムにしろ、元々はノーマン個人が雇っていたので会社に詳細なプロフィールは残っていない。普段から無口な二人だったから、ヘンリーは彼らの声どころか、くしゃみすら聞いた記憶はない。年齢も出身も家族構成も不詳。おおよその身長と体重、そして無表情の似顔絵だけが手がかりである。

たいていの探偵事務所は「発見は無理だ」と言った。しかしヘンリーには確信があった。

フランクとティムは一緒に動いている。だから二人組もしくは病人連れの三人組を捜してくれと依頼した。それならばと十数社の高名な探偵事務所が腰を上げた。捜査規模が大きいため、莫大な調査料を要求されたが、ヘンリーは金に糸目をつけなかった。

ノーマンが見つからなければ、今までの人生は無駄になっってしまう。なんとしても発見しなければならぬ。

「よく似た人間がいる」との情報は毎週のように飛び込んできた。そのたびにヘンリーは出かけ、面通しを行い、

がっかりして帰ってくるのだった。出かける先はアメリカ国内は言うまでもなく、カナダ、オーストラリア、イギリス、フランス、ドイツ、ロシア、インド、日本……。さらにはアフリカ大陸や中近東諸国へも足を運んだ。どんなに無駄足に終わろうともへこたれず、次の情報が入ると、またすぐ出かけていった。

一年が過ぎ――。

三年が過ぎ――。

五年後――。

ヘンリーは三十四歳になっていた。

この日、入ってきた情報はサン・パウロに支部を持つ探偵社からだった。探偵の一人が捜査対象に極めて似た二人組を目撃したというのだ。二人は互いに会話を交わすことなく、他人とのコミュニケーションは筆談で行っていたという。

ヘンリーは直感した。

間違いない。フランクとタイムだ。

彼は電話口に向かって、発見場所はどこかとせつついた。

「ベレンです」

「ベレン……それは、どこなんですか？」

「ブラジルの北部、赤道直下の港町ですよ」

ブラジル——。南米大陸からは初の情報である。

「どうやら二人は買い出しに出てきたようです。このまま追跡します。行方が判明次第、続報をお伝えしますのでお待ちください」

「は、はい、待っています！」

逸る気持ちを抑えつつ、受話器を置いた。

ヘンリーはすぐさまインターネットで検索した。

南米。ブラジル。ベレン。あった。

アマゾン川の河口に位置するパラ州の州都。

北部ブラジルの重要な港町。

彼はすぐ旅支度を始めた。とはいえ日頃から旅装を解いたことなどない身。現に先週、日本から帰ってきて、リュックを部屋の片隅に放り出したままだ。下着などを適当な枚数だけ放り込めば今すぐにも出かけられる。

彼は続報を待った。ひたすら待った。

再び電話が鳴ったのは四日後だった。

「ご連絡が遅くなりました」

「で、それで家を、隠れ家を見つけましたか？」

「いえ、ただ良いニュースと悪いニュースがあります」

「……悪いニュースから聞きましょう」

「——申し上げにくいのですが、彼らを見失いました」

「見失った……」

「順を追ってお話ししましょう。ベレンで発見した二人

組は、そこからアマゾン川をさかのぼる船に乗りました。うちの探偵も乗船し、二人組を見張り続けました。そして彼らが船を下りたのは、マナウスでした」

「マナウス……」

ヘンリーは受話器を持ったまま、壁の地図に近づいた。そこには南米大陸の巨大な地図が貼ってあった。ベレンには赤いピンを刺してある。

「ベレンの近くには、そんな名前の町はありませんが」

「地図をご覧ですね？ 近くじゃありません。ずっと内陸です」

「内陸の……」

「アマゾン川に沿って、ずっと西の方角です」

言われるままに指を動かしていくと——あった！

マナウス。なんとそれは——。

「ジャングルのど真ん中じゃないですか？」

「そうです。まったく中です」

ジャングル。密林。アマゾンの奥深く。

「そんな人里離れた場所なら、なかなか見つからないわけだ……」

「マグワイアさん、それは誤った先入観です。人里はありますよ」

よく聞いてみると、マナウスは人口百四十万を有するブラジルでも指折りの都会なのだそう。十九世紀の終

わり、空前のゴム景気に沸いたマナウスは、一攫千金を夢見た人間が、ヨーロッパから大挙して押し寄せたという。

「巨大な産業都市であり、重要な貿易港を擁していて、いわゆるアマゾン観光の拠点にもなっています。まあ旅行会社のパンフには大抵そう書いてありますよ」

「そうなんですか。これは偏見を捨てなきゃいけない。……で、お話の続きを」

「はい。じつはそのマナウスなんです、ウチの者が二人組を見失ったのは。ベレンから四日がかりの船旅で到着したのはいいけれど、人混みに紛れてしまったのだというのです」

なんとも残念な話だ。見失った場所が都会の中とは。

「それで、良いニュースは？」

「ええ、それがですね」

船を下りた二人は、そのまま港近くの大衆食堂に入っただけという。非常に小さな店だったため、尾行に気づかれるのを恐れて探偵は中に入らず、向かいの店先でガラナという炭酸飲料を飲みながら、出てくるのを待っていたらしい。そのうちに別の客が店の入口で足を止めた。男は挙動不審気味に左右に目を走らせ、戸口で待っていると、中の二人がすぐに出てきた。三人はそのままひとかたまりになって歩き出すと、店の前を通りかかった団

体ツアー客の群れに混じってしまった。あわてて追いかけたが、すでに三人は影も形もなかったという。

「気づかれたのでしょうか？」

「かもしれません」

「町中で尾行するのが一人ではそもそも無理だったので  
は」

「とんでもない。先回りして船の到着する場所ごとに数人ずつの探偵を配置しておりました。そのときマナウス班には他に四人おりましたので、都合五人。それが巻かれたのですから」

「巻かれた……」

「ええ、彼らは忍者のように消えた。言い訳がましいですが、あれは常日頃から逃げ慣れている動きだったと、ウチの者は言っております」

なるほど。あり得ることだ。

「ところでその話、ちっとも良いニュースではないんですが」

「失礼、申し忘れていました。その三人目の男というのがですね」

ヘンリーはハッと身が固くなるのを感じた。

「ま、まさか！」

「そうなんです。ハトマンさんに酷似していたと  
後はろくに聞いていなかった。」

ついに……ついに！

久々の朗報だ。五年間の捜索がついに報われた。

今度こそ。本当に今度こそ逃がしはしない。

地の果てだろうが、密林の深奥だろうが、とことん追いつめてやる。

翌朝すぐにニューヨークを出立すると、一路南米へと飛んだ。必要なビザは連絡を待つ数日の間に取得していた。

ブラジル最大の都市サン・パウロで乗り換える。ヘンリーが驚いたことに、マナウスには空港まであるという。サン・パウロからたった三時間半のフライト。

空から眺める南米大陸の中心部は、平らな森林よりも意外に山が多いという印象を受けた。そして残り四分の一あたりで、徐々に標高が下がってくると、熱帯雨林や数多くの川の支流が見え始めた。まさにこれこそイメーシ通りのアマゾンである。

ヘンリーはふと疑問に思った。何故ノーマンは身を隠す場所としてこんなジャングルの中を選んだのだろうか。聞くところでは、アマゾンにはまだ人跡未踏の地が多いという。息を潜めるには、地図のない場所が一番ということなのだろうか。しかし、その条件だけなら他にもつとよい場所がいくらでもあっただろうに、よりによって

赤道直下なんて。自分と同じく緯度の高いイギリス出身のノーマンが、あえて常夏の国を選ぶ理由が判らない。

飛行機は高度を下げ始めた。窓から眼下を見やると、幅の広い川があった。ははあ、これがアマゾン川だな。強烈な日差しに照らされた川面は二種類の色に塗り分けられている。昨夜資料で読んだ「ソリモンエスの奇観」だ。アマゾン川の本流であるネグロ川と支流ソリモインス川の二つが合流する地点で、互いの水が、成分や比重の違いによって混じり合わず、流速や色が異なるまま一本の中に二本の流れが共存する。

マナウスは、この合流点から十キロ上流にあるはずだが……。

見えた！ 周囲をジャングルに囲まれたそこには林立するビル群があった。耳で聞くのと実際に目で見る風景とは段違いである。これは本物の都市である。まさかこんなジャングルの中にあるとは――。彼にはこっちの方が、合流する川以上の奇観に見えた。

降り立ったのはエドゥアルド・ゴメス国際空港。時に三月三日、正午にさしかかろうとしていた。さすがは赤道直下。気温も湿度も並々ならぬ高さだ。

「雨期の真っ最中です。特に今年は異常とも思えるくら

い、よく降ります」

空港に出迎えた探偵は、彼を車に乗せるとそう言った。「先に写真をお見せしましょう」

運転しながら探偵の差し出したそれは、あらかじめ写りの悪いFAXで受け取ったのと同じものだった。船中で隠し撮りしたのだろう、二人組が写っており、最後の数枚には、店の前で周囲に目を配っている男の姿が生写真ならではの克明さで写っていた。

「……どうです？ お捜しのターゲットですか？」

ヘンリーは胸の動機が高鳴るのを抑えながら答えた。

「間違いありません」

車を棧橋のそばに止めると、探偵は問題の大衆食堂までヘンリーを案内し、ついでに昼食をとった。

「大きなレストランだったら、近寄って会話を盗み聞きすることもできたのですが」

よほど警戒していることの証拠であろう。口の利けるノーマンが店に入らなかったことも頷ける。

「さつき空港で確認したら、ベレンとこのマナウスの間にも飛行機が飛んでいますよね。フランクとティムは何故わざわざ五日もかかる船便を使ったのでしょうか？」

ヘンリーの問いに、探偵は至極もつともな疑問だと頷くと、

「おそらく、飛行機の方がチェックが厳しい分、身元が  
バレル恐れがあるからじゃないでしょうか」

なるほど一理ある。

食事を終え、ヘンリーと探偵は立ち上がった。

「宿の方は、港の近くがよろしいということで、アナ・  
カシヤ・パレス・ホテルに部屋をとっておきました。三  
つ星で英語も通じます」

「ありがとうございます」

「ところで、マグワイアさん。本当に我々の仕事はここ  
まででよろしいのですか？」

「ええ。これ以上お願いすると、私の貯金が底をついて  
しまうでね」

「またまた、ご冗談を」

ヘンリーは探偵に別れを告げると、ホテルにチェック  
インした。三つ星ホテルにもかかわらず、さほど高級感  
は漂っていない。シンプルで小ぎれいと評すべきか。

荷物を部屋に置くとすぐ外線で電話をかけた。ひとま  
ずマナウスに到着したことだけをニューヨークに伝える。

上着を脱いでポロシャツと膝までの短パンに着替え、  
外に出た。陽はまだまだ高く暑い。すぐに汗が噴き出し  
てくる。暑い国は苦手だ。できれば長居したくない。

ヘンリーは表通りを横に折れ、細い路地に入っ  
た。そのまま裏通りに出ると、殊更いかがわしげな場所

を選びながら、歩を進めた。

ノーマン探し——あくまでも上辺うわべはフランクとティム探しだが——に世界中を飛び回ったこの五年間、図らずもさまざまな街を訪問した。子供の頃から地図を覚えるのは得意だったから、一、二日も巡れば、どこにどんな種類の人間が集まるのか手に取るように判った。とはいえ大抵の場合、到着後すぐ探偵に引きずられるように現場に赴き、相手に気づかれぬよう面通しを行うわけで、それで違うと判定できれば即刻退去する。そんなことの繰り返しである。

しかし、ごくたまに本人かそうでないか、すぐに判断できない場合がある。そんなときは現地に何泊かして、当人をあらゆる方向から調査し、最後の手段として接触を図ることもある。もし本物のフランクかティムであればノーマンは近くにいる。もう二度と復讐の機会を逃したくない。次に本人を前にすることがあれば、間髪入れず命を奪う。これしかない。したがって探偵がいては邪魔なのである。

いざというときのため、拳銃を現地調達する癖がついた。飛行機に持ち込むわけにいかないのです、到着した先で探して購入するのである。当然、非合法だ。しぜん裏社会にも詳しくなる。初めての町でも、どこに行けば入手できるのか鼻が利くようになる。

いっばしの都市評論家。

——自慢にもならない。ヘンリーは苦笑すると、目に付いた一軒の店に入っていた。

そしていつものように拳銃を手に入れた。

マナウスに到着して三日後。

この日もヘンリーは朝から街をぐるぐると歩いていた。ポロシヤツに膝までの短パンというラフな服装。目深にかぶった野球帽は、鋭い視線を隠してくれた。腰に巻いたポーチの中には、財布やハンカチなどに混じって小型拳銃が入っている。

この日、ヘンリーの眼はついにフランクの姿を捉えた。久しぶりに見たフランクは以前にも増して逞しく陽に焼けており、探偵の写真と同じく白いTシャツに紺のジーンズというラフないでたちで大きな体を包み、スーパーマーケットに入っていた。

ヘンリーは追いついて、フランクの肩を叩いてみたい衝動に駆られた。しかし今もノーマンにかす傅いてい可能性のある彼のこと、ヘンリーがここにいる理由を知れば、復讐を妨害される。そうなれば厄介だ。場合によってはフランクに銃口を向けざるを得ないだろう。できればそんな事態は避けたいものだ。

スーパ―の門口を出たフランクは悠々とストリートを歩いていく。どうやら向かう先は港の棧橋らしい。船に乗るつもりか。ヘンリーは距離を一定に保ちながら、フランクの背中を追った。ごく自然な歩調で。

——ハッ。

十歩ほど歩いたとき、ヘンリーは背中に視線を感じた。とつさに道路脇の露店が拡げていた屋台のフルーツに手を伸ばし、

「クアント・クスタ？（いくら？）」

と、店の女主人に覚えたてのポルトガル語で尋ねていた。言われた額の小銭を渡していると、背後を一人の男が通り過ぎていった。

——ティム。

まさに間一髪だった。懐かしいフランクの顔を見て、不覚にも気を緩めてしまったが、彼らが二人一組で動くことは判っていたことじゃないか。

ティムはあたりに油断なく目を配りながら、ゆっくりフランクの後をついていく。

ヘンリーは背中を伝う脂汗を意識しながら、つとめてさりげなく二人の方に体を向けた。先をゆくフランクがショーウインドウの前で足を止めた。その横をするするとスリ足のティムが通り過ぎた。やがて先ほどと同じぐらいの距離があくと、フランクはウインドウの前を離れ、

今度はタイムを追うように歩き始めた。

なるほど彼らはそうやって、相手が尾行されていないかどうか、互いに気を配っていたのだ。なんという周到さだろう。彼らは五年もそうしてきたのだろうか。日々の逃亡生活が彼らの体にそんな癖を身につけさせたのだろうか。

ヘンリーは感動すら覚えた。

——それならば自分は彼らの上を行かねばならない。彼らの予想を上回る行動に出なければ、勝ち目はないということだ。

ヘンリーは名前の知らないフルーツを嚙かじりながら、尾行を再開した。

探偵が目撃した時の話では、二人は港の近くでノーマンらしき人物と落ち合ったという。ならば、すぐそばにいるのか、ノーマンが。

港に到着した。二人は立ち止まることなく、そのまま栈橋に停泊している船の一つに乗り込んだ。三階建ての、このあたりではよく見るタイプの客船である。

ノーマンもあの船に乗っているのか？

汽笛が鳴った。出発の合図だ。

ヘンリーは他の駆け込み乗船客の中に混じって、一緒に乗り込んだ。船はゆっくりと陸地を離れると、船首をネグロ川上流に向け、ゆっくりと遡航し始めた。

ギラギラと照りつける太陽の光に温められた空気の中を、うなるような汽笛が港に別れを告げていた。まるで再びそこへ戻ってくるのではないという運命を知っていたように。

行き先も確認しないままに乗船したヘンリーは、すれ違った船員らしき男に質問してみたが、英語が理解できないらしく、さっぱり要領を得ない。

船は観光船ではなく、もっぱら生活物資の輸送専門の船らしい。床には食料を詰めた段ボールや木箱が所狭しと置かれている。生鮮食料だけでなく缶詰類やペットボルのドリנקも見える。その横には釣り竿や漁のための網などがまとめて置かれている。

乗客の数も少なくない。女性や子供の姿もちらほら見かけたが、ほとんどは壮年以下の男性だ。荷物は彼らによつて陸揚げされるのだろう。

乗客は各自で張ったハンモックの上に寝転がっていた。寝転がるという表現が適切かどうかは判らないが、ハンモックを船内に張るといふのはこのあたりの風物詩であるようだ。行き交う他の船にも鈴なりに張られた様子が見受けられた。あんなものに揺られては二重の船酔いに苦しむのではないかと思うのだが、見ている分には涼しげである。

川の左右に広がる光景はいつしか、こんもりと茂る常緑樹、つまりジャングルに取って代わっていた。いよいよ本物のアマゾンに突入だ。

乗客たちはそれぞれ思い思いのやり方で時間を過ごしていた。ハーモニカを吹く者。チェスに興じる者。船内には彼らの足下を流れる大河のようなゆったりとした空気が流れていた。

逆にヘンリーは、これ以上はないというほど激しい動悸に胸が張り裂けそうだった。この先の、このジャングルのどこかにノーマンはいる。いるはずだ。

ロンドンを後にし、ニューヨークに渡り、そしてこのアマゾンへ。

まさかこんな場所に足を踏み入れることになろうとは想像もしていなかったが。

……どこだろうと構わない。地の果てだろうが、宇宙の果てだろうが、追いつめずにおくものか。自分には追う権利と義務があり、奴には追われる宿命があるのだ。

輸送船は幾度か川沿いに設けられた栈橋に停まり、何人かの人間と荷物を下ろした。しかしその中にはフランクとティムの姿はなかった。

船内をうろついて自分より先に二人に発見されては元も子もない。そう考えたヘンリーは、降りる客に的を絞

り、乗降口が見える場所に陣取って、姿が目立たないよう荷物の隙間から監視を続けた。

やがて、そう、マナウスの港を出航して三時間が経過した頃、船長が乗客らにワインを振るまい始めた。

不覚にもうたた寝していたヘンリーは、船員の一人に声をかけられ、「うまいから飲め」と言わんばかりに、強引にワイングラスを手渡された。

風通しの悪い場所にいたヘンリーにとって、冷えたワインは非常にありがたかった。

伸び上がって周囲をうかがうと、先ほどよりも川幅が狭くなっていた。川沿いに建つロッジなども見えなくなり、川べりを埋め尽くす常緑樹の繁り具合も濃くなっていた。

船内は乗船したときに比べるとずいぶん静かになっていた。子供たちの走り回る声も聞こえない。立ち上がって目をやると、ハンモックで気持ちよく昼寝中の乗客の姿はそこかしこにあったが、その数は出発時の半分ぐらいに減っていた。

彼はべつとりと汗のついた服を乾かしたくて、船べりに進み出た。相変わらず強烈な日差しの下、吹いてくる風は温かい。冷たいアルコールが体に染みいったおかげで、全身の倦怠感が消えていく思いがした。

その時――。

背後からヘンリーの肩がポンと叩かれた。

全身の血が一気に逆流した。

見つかつた！

ヘンリーは両眼を閉じると、自分の間抜けさを呪つた。油断していた。ここは“敵地”だつたのだ。警戒しても、し過ぎることはないのに――。

彼は、すぐ振り向いて自分の肩を叩いた者の正体を確かめることができなかった。船べりの手すりを握つた手の中に、じんわりと脂汗が滲み出てくる。

それでもようやくやくのことで、口の中にたまつた唾を飲み込むと、上半身を開き、ゆっくりと振り返つた。

「……………」

ヘンリーは自分の眼に映つたものが、すぐには信用できなかつた。そこに立っていたのは、フランクでもティムでもなかつた。

「ハンス」

気のせいか、ヘンリーの耳に届いた声はひどく弱々しかつた。

「社長」

ノーマン・グリーンウッドその人であつた。

彼は細めた目でヘンリーを見つめていた。彼の髪や眉は、まるで脱色したように真っ白だつた。

いきなりの登場に度肝を抜かれたヘンリーは、ノーマンに誘われるまま二階へと上がった。

「さあどうぞ」

ノーマンが招き入れたのは、船首側にある小さな個室だった。入ってみると三方の窓の開いた見晴らしのいい部屋で、中央にテーブルと二脚の椅子が置かれていた。

フランクとティムは扉のそばに立って二人を出迎えた。彼らはいくまで無表情だったが、ヘンリーがそばを通るとき、わずかに目礼を寄越した。

「そこにかけてくれ」

ノーマンは、すっかり色のはげ落ちた椅子の片方を指し示すと、自らも同じような椅子にどしんと腰を下ろした。

「二人の再会を祝して、乾杯しようじゃないか」

ノーマンはテーブルのワインボトルを手にとると、用意していた二つのグラスに赤い液体を注いだ。

「さあ、手に取りたまえ」

言われるままにグラスを持ったが、飲むどころではない。ノーマンは気にした風もなく一息にぐいっと呷あおると、満足そうにウーンとうなった。

ヘンリーはグラスをテーブルに戻し、上目遣いにノーマンの顔を覗き込みながら、話しかけた。

「いつ、私にお気づきに？」

「ああ……」

ノーマンは夢から醒めたように目を開けた。グラス越しにヘンリーの顔を見つめてくる。

「君らしき男が後をつけ、そのまま船に乗り込んで来たと、タイムがね」

「やはり——」

街中で遭遇したとき、すでに気づかれていたのだ。目をやるとフランクもタイムも扉の方を向き、後ろに腕を組んだ姿勢で立っていた。その姿は、二人が今も変わらずノーマンのボディガードを勤めていることを示していた。

グラスを置いたノーマンも二人の背中を眺めながら、ゆっくりとしゃべり出した。

「私は先に船に乗って、二人の戻るのを待っていた。で、乗り込んでくるなり言うじゃないか。ハンスらしき男が追いかけてきて、そのまま乗船したと」

ノーマンはうれしそうに両手をぱちんと合わせた。

「数日前にも、ベレンから二人を尾行している人間がいたとフランクは言っていた。今度はいつもの連中とは様子が違うというから、おそらく君だろうと察していたんだよ」

「いつもの連中？」

一瞬、ノーマンの顔がこわばったように見えた。しかしすぐ肩をすくめるとグラスを飲み干し、自分の手で二杯目をついだ。

「君が私を発見したのは——あれは私立探偵だったんだろうね——発見したという報を受けたのは、今回が初めてだろうか？」

「ええ、そうですが」

ノーマンは、遠慮せずに飲めよと、ワインボトルの口を向けたが、手のひらを見せて辞退した。今はとても酔う気分ではないし、先が聞きたかった。

「私を捜しているのは君だけじゃないんだよ。だから私は身を潜め続ける必要があった」

意外な話にヘンリーは驚いた。自分の他にも捜索者が、追っ手がいるというのか。自分と同じぐらい、強い動機や熱意を持つ人間がこの世にいるのだろうか？

あるいはいるのかもしれない。ノーマンの裏の顔を知れば、第二、第三のフレッド・モースがいて、なんの不思議もない。

ノーマンは話を続けた。

「君が今日ここに来てくれたことを、私は感謝すると共に、詫びずにはいられない。突然、姿を消して申し訳なかった」

いきなり謝罪の言葉を聞き、ヘンリーは戸惑った。他

人に対して頭を垂れるなど、ノーマンを知る者にとって、およそ想像もできない行為であった。

ヘンリーはかねてより抱いていた疑問を、目の前の男にぶつけた。

「社長、教えてください。あの日どうやって病院から抜け出すことができたのですか？ どうして私にひと言の相談もなく身を隠されたのですか？」

「——当然の質問だろうな。世界の中心地であれだけ鎬しのぎを削っていた男が、ふつんと消息を絶ったのだから。当時のマスコミは訳も判らず、憶測でいろんなことを書いていたが、ほとんどがデタラメだった」

ノーマンは持っていたグラスをテーブルにことんと置くと、組んだ膝の上に両手を乗せた。

「君にはすべてを話そう。そのためにここへ呼んだのだからね」

「お願いします」

ヘンリーの喉がごくりと鳴った。

ノーマンは遠い目をしながら説明を始めた。

「病院からこっそり抜け出したのは、当時のマスコミが書いたとおりだよ。重傷で身動きできない私の命をここぞとばかりに狙う凶悪犯から身を守るためだ。もっと安全な場所に人知れず移ろうとな。

じっさい病院を爆破するという電話がかかってきたり、

本気か冗談か、飛行機で突っ込んでやるという手紙が新聞社に届いたりしたらしい。

警備側は、私を安全な場所へ移送する計画を立てた。無論、極秘裡にね。しかし私は当局の裏をかいて、移送日の前日に病院を抜け出した」

「えっ」

「ふふふ、驚いたかい？ 最近の凶悪犯は警察の上を行くからね。FBIが立案した計画も私から見ればきわめて杜撰ずさんなものだった。だから独自に動いたんだ」

「一体どうやったんですか？」

ノーマンは含み笑いをかみ殺すように上体を前に倒した。

「嚴重な警戒をかくぐって侵入することに比べれば、抜け出すことなんて、はるかに簡単だ。もつとも、二人の協力がなければできなかつたことだけどね」

ノーマンはフランクとタイムの背中をかえりみた。

「……二人の協力だけですか？」

「何？」

ノーマンの眉間に皺が寄った。構わずヘンリーは畳みかけた。

「彼らの助力だけで抜け出せたとは思えないんですが」  
するとノーマンは肩を揺らして笑い出した。

「ハハハ。さすが私の見込んだ男だ。よく気づいたね」

「当たり前ですか？」

「ああ、当たり前だよ。——確かに、私の失踪を助けた  
“組織”は存在する」

ノーマンは初めて彼をサポートする影の存在を口にした。しかもヘンリーが日頃から呼んでいたのと同じ符丁、  
“組織”という言葉で。

ノーマンは船の進行方向に目をやった。つられてヘンリーも眺める。

いま船はどのあたりを航行しているのだろうか。幾つもの支流を通過して、かなり奥地に分け入ったはずだ。それでも船は前に進むことを止めない。ノーマンらが下船する様子もない。

部屋の外をぐるりと巡る廊下を、大きなだみ声をあげて船員たちが歩いていく。どうやら酔っぱらっているらしい。そのうちの一人は他の二人に両肩を支えられ、引きずられている。手に持っている瓶は先ほど船長が振る舞ったワインのようだ。船員がこんな調子で大丈夫なのだろうか。

「ところが——」

ノーマンの声にヘンリーは再び視線を相手の顔に戻す。ノーマンは外の風景を見つめたままである。いや、その目の先にあるのは五年前の自分の姿か。

「私は、その“組織”さえ裏切ったんだ」

「裏切った……」

「ああ。『組織』が巧妙な手口で警備の目をそらしにくれたおかげで、移動ベッドに乗った私、フランク、ティムの三人は、誰にも気づかれず病院を脱出することができた。しかし筋書きに乗ったのはそこまで。私はフランクに言って事前に用意させた車に乗り込むと、計画にない方角へと全速力で走らせた——」

ヘンリーの頭は混乱した。どういうことだ。

要するにノーマンは脱出に手を貸した『組織』さえ振り切って姿を消したと言っているのだ。なぜ？

しかもその後、グリーンウッドグループを一切かえりみることもなく消息を絶ち続けていた。なぜ？

疑問が疑問を生み、謎は解けないまま、どんどん膨らんでいく。

「どうして……どうしてなんですか？」

ヘンリーは核心に迫るべく、身を乗り出すようにしてノーマンの顔を正面から見据えた。

ノーマンは、ふうと息を吐くと、

「私はこの五年間、世間との表立った交流を一切断ってきた。私を見つけようとする連中の影が差せば、すぐに隠れ家を移した。そうやって生き延びてきたが、とうとう君に発見された……いや、以前からフランク達には言い含めておいたんだ。もしも追っ手が君だったら、私の

元へ誘導してくれとね」

「なぜ？」

もはやヘンリーの口からは疑問符しか出てこない。

「なぜ、かい？ それは君がこの世でおそらく唯一、私の真情を理解してくれる人間だと思うからだよ。……思い出すじゃないか。私たちはよく美術館で会っては一緒に作品を批評しあったね」

ノーマンは照れを隠すように右手で白髪をかき上げると、視線を足許に落とす。

ヘンリーは予想もしていなかった告白を聞かされ、別人を眺めるような目つきで相手を見つめ直した。ノーマンの物言いは、社長が一秘書に向けたものではなく、長年の親友に対するものようであった。そういえば先ほどのからの彼の態度には、思い人に再会したとでもいうような高揚感がかいま見えた。ノーマンはきつと、ヘンリーは自分の身を案じて、ここまで追いかけてきてくれたのだと信じ込んでいるのだろう。

胸に秘めた復讐の炎をうかがい知ることもなく――。

「社長」

「……その肩書きはもういいよ」

「いいえ社長、教えてください。なぜ、そうまでして世間から身を隠したのですか？ これまで積み上げてきたものをかなぐり捨ててまで」

テーブルを挟んで二人の間の距離は、ほんのわずかだ。この間合いなら撃ち損じることはない。確実に仕留める自信がヘンリーにはある。フランクとティムが止めに入る暇もないだろう。

しかし、このままノーマンの行動に関する謎が謎のまま消えてしまう事態もまた、我慢がならない。十六年越しの仇なのだ。奴のすべてを把握した上で、正義の鉄槌を振り下ろさなければ意味がない。ヘンリーにはそう思えるのである。

船が向きを変えた。また違う支流に入っただけとされている。遠心力に二人の体が傾く。

「……判った。話そう。そのために来てもらったんだからね」

その時だった。大きな衝撃が船体を揺るがした。

ヘンリーとノーマンの体が、ゴムまりのように椅子から浮き上がった。

「な、なんだ？」

テーブルのワインボトルやグラスが宙に舞った。

赤い液体が、まるで返り血のようににはじけ飛んだ。

どこからか怒号と悲鳴が聞こえてくる。

ヘンリーの目の隅で、フランクとティムの体が壁に打ち付けられるのが見えた。

ヘンリーも傾いた床の上を転がった。途中で柱につか

まろうとしたが、滑ってきたテーブルに側頭部を叩かれ、さらに転がり落ちていった。

「社長！ 社長！」

船はさらに傾きを増していく。このままでは沈没する。船といっしょに水の下に引きずり込まれる。

とにかく外に出なければ。彼はやみくもに明るい方向を目指した。

「ハン——ハンス！」

呼ばれて振り向くと、そこにノーマンが横たわっていた。ヘンリーは腕を伸ばし、ノーマンの脇に差し込むと引きずりあげた。そして今や床になった壁の上を少しずつ窓を目指して前進した。

衝撃が二度、三度と襲ってくる。どこかでガラスが割れる。メリメリといういやな音と共に周囲の板壁がはがれていく。人々の叫び声があくつも交錯する。

ヘンリーが記憶しているのは、そこまでである。

気がつくのと、いつしか雨は小降りになっていた。

ずいぶんと長く降っていたように感じたが、実際は十分にも満たない時間だったろう。

ここまでの道のりを回想している間も、ヘンリーの両眼は、じつと川面の向こう、仇敵のいる方向を睨んだまま動かなかった。

濁流にも倒れずに残った木々が黒く薄ぼんやりと見える。彼はまばたきすら自分に許さなかった。そして視点を固定したまま、右手に持ったままの拳銃を短パンのポケットに仕舞った。撃つ前に確かめることがまだある。

雨足は急速に弱まった。

やがて晴れ間が広がりだした。

——いた！

ヘンリーがよじ登っている樹よりは遙かに細い。ノーマンはそれでも必死にかじり付いていた。ぐっしよりと濡れた白髪は頭にへばりつき、両手と両足を樹の幹に巻き付けたまま、目を閉じている。

「社長！」

ヘンリーの大声に、ノーマンはうつすらと目を開け、弱々しく手を振ってみせた。

無事な様子にヘンリーは安堵の吐息を漏らした。周囲には、先ほどまでであった死体は見あたらぬ。みんな流れてしまったらしい。そうと知って重ねてホツとした。

雨がやんだ。

川はさらに水量を増していた。ゴウンゴウンと音を立てながらうねる濁流はすさまじく、オリンピックの水泳選手でも、泳ぎ渡ろうなどとは考えないだろう。

周囲の様相に変化があった。降り出す前の倍以上もの

物体が、川面に揺れる木々に引つかかって、水のうねりに翻弄されていた。

ヘンリーの樹の水際あたりにも、見覚えのある網やハンモックの切れ端が巻き付いていた。

「この川は——」ノーマンが叫ぶように話しかけてきた。「おとついまではなかったはずだ」

「なかった？ 昨日できたとしても言うんですか？」

「そうだ。つかまつてる樹の幹を観察してみる。まだ水に浸かってからそう長くない。二日前までここには普通の密林があった。こんなふうには水没する現象は珍しくない。一般に“浸水林”と呼ばれている」

そんなことが起こりうるのか？ ヘンリーには信じがたい話だった。

「これがアマゾンだ。都会の常識は通用しないぞ。しかも今年の雨量は異常だ。川の形は日々変化するし、昨日あった地面が消えて川になってるなんて日常茶飯事だ。おそらく我々の船は、船員の知らない浅瀬か倒れた樹にでも乗り上げたんだろう。しょうがない」

しょうがないで片付けられる話じゃない。現に死人まです出ているのだ。

「この分じゃ、フランクもタイムも……」

さすがのノーマンも二人の生死が気になるのか、しばらく周囲を見回していたが、突然おおっと大声を張り上

げてヘンリーを驚かせた。

「どうしました？」

「アレに気づいていたか？」

ノーマンが指さしたのは、川の上流、ヘンリーの背中側である。何事かと目をやったヘンリーはその光景に息を飲んだ。

——アマゾンの怪物！

人跡未踏のアマゾンの奥に、誰にも知られることなく棲息している異形の生物。それがいま人間どもに襲いかかってきた——。

「うわわっ」

ヘンリーは危うく枝から落ちそうになったが、すんでのところで持ち直した。

「ひどくやられたな」

ノーマンの冷静な声に、怖々ながらあらためて目をやると、その正体は怪物などではなく、自分たちが乗ってきた船だった。

転覆し、川の濁流に弄もてあそばれた船体は、痛ましいまでに傷ついていた。中央部はまるで絞った雑巾のようにねじれており、自分があそこにいたのかと思うと、ぞつとせすにはいられなかった。

おそらくヘンリーとノーマンは、船が倒れきる前に、船外に放り出されたため、大した傷を負うこともなく無

事だったのだ。運が良かったという他ない。

もはや半分残骸と化した船は、川面の木々によって、まるでそう、昆虫採集の標本のように、川の真ん中に留められていた。

船長も船員も、そして乗客たちも皆、あの濁流に呑み込まれ、命を落としてしまったのか……。

ヘンリーはその光景を想像し、ブルツと体を震わせた。するとノーマンが、

「恐ろしいな」

と言うのが聞こえた。しかし意味が違った。

「こんど大きな流れがああ船を直撃したら、下流にいる我々は無事では済まんぞ……」

なるほど確かにそのとおりである。いまやるべきは、過ぎ去った事故に思いを馳せることではない。現状で起こり得るべき最悪の事態を想定し、対処する方策を練ることだ。

考えてみれば――。

ヘンリーは、常に過去に執着して生きてきた。未来予想図を描いたこともなく、過去に受けた非道の仕打ちに復讐することだけを原動力にして生きてきた男。

逆にノーマンは、いつも未来を見つめていた。他人に対する思いやりや哀れみもなく、ひたすら自分の野望を実現することだけに邁進してきた男。

なんと二人の生き方の真逆なことか！

……いや違う。ヘンリーは首を振る。

確かにこの十六年という長き年月、自分は復讐だけを念じて生きてきた。そのことに後悔はない。しかしその間、一度も思い悩まなかったと言えば嘘になる。

特にこの五年間。もしノーマンを見つけることができなかつたらどうしよう。死んでいたらどうしよう。そう思うと眠れない日もあった。セルフコントロールに苦しみ、精神科の診察を受けたこともあった。しかし自分はそんな苦境を乗り切った。そしてノーマンを発見した！復讐が完了すれば、そこから自分の未来が始まるのだ。そのためこそ、これまでがんばってきたのだ。

決して未来をないがしろになどしていかない。

決して――。

「ノーマン！ ノーマン・グリーンウッド！」

首をねじって船を見つめていたノーマンは振り向いた。

「なんだね、ハンス・マグワイア」

「まだ教えてもらってないことが……あります」

「ん？」

訝いぶかしげに小首を傾げるノーマンに対して、しばし躊躇した後、ヘンリーは腹に力を入れて叫んだ。

「まだ質問に答えてくれませんか」

「質問？」

「なぜ “組織” を裏切ってまで世間から身を隠したのか、なぜ、会社も何もかも捨てて、こんなところで暮らしているのか、です」

「……ああ、そうだったな。しかし今はそんな話をして  
いる場合じゃないだろう。危険な状況で——」

「いま必要なんです！」

ヘンリーは自分でも驚くほど大きな声を張り上げた。

ノーマンは意外そうな顔をしながらも、ヘンリーの表情に何かを感じ取ったらしく、口を噤つぶんでしまった。

沈黙が流れる。それでも先に破ったのはノーマンだった。ため息を一つつくくと、

「判った、話そう。そのつもりだったんだからね」

船上の会話の続きが再開された。向こうは下半身を水に浸して樹に抱きついたまま、こちらは樹の股に座った格好という、ひどく奇妙な状況で。

「——私が物どころついたころには、もう母親はこの世にいなかった。産後の肥立ちが悪く、私を産んですぐに他界したのだ。父イアンは男手ひとつで私を育て、幼少の頃より帝王学を徹底的にたたき込んだ。そして高校生になると、父の片腕として頼りにされるほどに成長していた」

ノーマンはいきなり身の上話を語り始めた。ヘンリー

は真意を測りかねたが、無駄話をする相手ではないので、黙って耳を傾けていた。

「そんな私を周囲の人間は、血も涙もない冷血漢ののしと罵った。簡単にいえば『あいつに人の気持ちが判るもんか』といった調子でね。

バカバカしい。人の気持ちを推し量れないで、どうして人を使いこなすことができるというのだ。そんなことを言うやつらは、現代の帝王学の何たるかを理解したらん阿呆どもだ！」

ノーマンは吐き捨てるように言った。

「判るからこそ、敵の弱みにつけ込むことができるんじゃないか……」

最後の方はか細い声になった。ヘンリーは「それは違う」と言い返したかったが、すんでのところだと思いとどまった。ひとまず最後まで聞こう。そう思って、無言で先を促した。

「君も知つてのとおり、父の創業したグリーンウッド社は私を迎えることで飛躍的な発展を遂げた。当時、景気の良くないイギリス経済の中で、私は数多くの人間に恩恵を与えた。おかげで『貴公子』と呼ばれ、マスコミの寵児に祭り上げられたりもした」

——その陰で泣い者もいるんだぞ。

するとヘンリーの心の声が聞こえたのか、

「もちろん、勝利の陰には敗者がいる。だが仕方のないことだ。資本主義とはそういうものだからな」

——まだ言うか。貴様のせいだ……。

思わずポーチの拳銃に手を伸ばしかけた。その重みを確認すると、少しだけ冷静になることができた。

「……ハンス。じつはいま初めて告白するが、私の業績は、すべて私一人の力で達成したのではない」

「——どういうことですか？」

「私はある時、悪魔と契約を交わしたのだ」

「悪魔？ ご冗談を」

「ハハハ、あながち冗談でもないぞ。話せば君も納得するだろう」

ノーマンは樹の幹に絡めている腕をゆるめると、疲れをほぐすようにブルブルと震わせた。さらに話を続ける。

「イギリスで我が社が流通業界で頭角を現した頃、父が二人の男を、私の元へ連れてきた。父は言った。

——息子よ。耳寄りな話がある。ある“組織”から我が社を全面的に支援したいという申し出があつてな。彼らは世界的な規模で裏社会に通じている。もし我々が世界進出を視野に入れていたのであれば、全面的なバックアップを約束すると言うのだ。どうやら彼らはお前の才能を高く買っているようだ。見返りは決して安くはない

が無理な相談ではない。どうするかはお前にまかせる。

世界に打って出るのは私以上に父の夢でもあった。いくら私に才能があったとしても、ロンドンからぽつと出の会社が、そうたやすく世界に通用するまでになれるとは思っていないかった。

私は“組織”の話に乗った。そして……父が連れてきた二人の男というのが“組織”の使者であり——」

「まさか……」

「そう、フランクとティムだった」

なんと二人はグリーンウッド子飼いの人間ではなく、“組織”との連絡係だったのか。それともお目付役か。

「彼らの力は恐るべきものだった。彼らにできないことはおよそ無かった。

たとえば情報収集能力だ。ある企業間が極秘裡に進行中の合併・買収計画、土地開発や企業の誘致計画といったものから、A社のS部長はどこそこに愛人を囲っているだとか、市役所の出納課長は使い込みが露見するのを恐れて日々びくびくしている、などという、個人の弱みに関するものまでな。そしてどの情報も、私の計画を邪魔する者を消すには、絶好のネタばかりなんだ。

私は驚かずにはいられなかったよ。そして得られた情報は有効に使わせてもらった」

「——お教えください」

「なんだい？」

「裏の仕事はすべて“組織”の手によつて？」

「そうだ。私が直接、手を下したことはない」

「実行するかどうかの判断は誰が？」

「それは私だった。……言い落としたが、最初の頃は彼らの方から計画書仕立てで情報を持ってきていたが、慣れてくると、私の方から、どの社の誰に弱みはないかという注文を出していた。それに対して彼らは求める以上に重要な情報を持ってきた。

いわば私が立案し、決断して、彼らが遂行する。もつとも細かな点はおまかせだったがね」

ヘンリーは腕が小刻みに震えるのを抑えることができなかった。

いまここでノーマンを撃ち殺したい！

奴の心臓に鉛の銃弾を浴びせたい！

これは父の分、これは母の分、そしてこれは姉の分と一発ずつ数えながら……。

しかし、しかしまだ確認することが残っている。

「社長はそうやってロンドン一、いやイギリス一の企業にまでグリーンウッドを発展させたのですね」

「そうだ」

「そして、更なるステップとしてニューヨークに乗り出

した」

「そのとおり。世界への足がかりとしてアメリカへ進出したかがイギリスの一企業がアメリカという大市場に挑戦したのだ。最初は誰もが私の失敗を予想していた。なのにどうだ！ 数年後にはアメリカ流通業界のトップに躍り出たのだ。」

君はこの偉業を “組織” のおかげだ、と言うかね？」

「……………」

「とんでもない。彼らはいくまで道具だ。使い道を決めたのは私ノーマン・グリーンウッドだ。私という傑出した人物の頭脳があつたからこそ、 “組織” の力を有効に活用することができたのだ」

有効活用。まさにノーマンの口癖だ。

「——裏返せば、彼らに自分たちの力を使いこなす頭脳はなかつたのだ。いわば我々は、世界一優秀な指揮官と世界一強力な軍隊の組み合わせだ。誰が攻めてきたって太刀打ちできるわけがない。この世に敵なし。君に判つてもらえるかな。指先一本で気に入らない人間を消すことができるといふことが」

ハハハとノーマンは笑った。しかしその笑いには少しも力がこもっておらず、どこか自虐めいた響きがあつた。

「——すべてがゲームに思えたよ。某研究所の研究業績を発表直前に奪い取つたのもゲーム。某社の社長に濡れ

衣を着せて自殺に追い込んだのもゲーム。判らないだろうな、この気持ち」

さらに冷ややかに笑い続ける。

聞いていたヘンリーは胸が悪くなり、面を伏せて顔をしかめた。しかし閉じた瞼の裏に突然ある人物の顔が浮かび上がった。夜のパブで赤い顔を寄せてきたあの男。

「社長はまさか、アランを……」

「ふふふ、アラン・ベネットか——そうだよ、彼を事故死に見せかけて亡き者にしたのは私だ」

ヘンリーはもたれていた枝に顔を押しつけた。

あまりに凄惨な話の連続に気分はますます悪化した。

「ふ、今までで一番驚いたようだね。……秘書としてのアランの頭は固く、古すぎた。それでも一応は推薦した父への義理があったから使っていたのだが、アランにとって最大の不幸は、君という男の出現だった」

「私ですか？」

「そうだよ。君という若い感性を持った逸材が目の前に現れたんだ。だからアランをお払い箱にしたんだよ」

「なにも殺さなくても……」

「ああだこうだと理由をつけて、秘書の座にすがりつこうとしたからね。思い切って始末した」

——どおりで犯人が検挙されなかったわけだ。警察に逮捕されて実情をしゃべられては元も子もない。アラン

を撥ねた車に乗っていた若者たちも、闇から闇に葬られたのだろう。

「アランの葬式の時の、私の沈痛な面持ちはどうだったかな？ 本当に悲しんでいるように見えたかい？」

「ひどい！ ひどすぎる！」

ついにヘンリーは感情を爆発させた。するとノーマンもますます大きな声になって、

「そうだよ、私はひどい男だ。なにしろ悪魔と契約書を交わしたのだからね。ハッハッハッハッハッハ」

まさに悪魔的な笑いだった。ヘンリーは思わず耳をふさいだ。これ以上は聞くに堪えない。

こんな男はこの世に生かしておいてはいけない。天罰が下されなければならぬ。天がやらないのなら代わって自分が――。

ソロソロとポーチの拳銃に手を伸ばしかけたとき、ノーマンの様子がおかしいことに気づいた。

相変わらず、濁流の中で樹の幹にしがみついている姿勢は同じだが、幹に顔を埋めたまま泣いているようにも見える。まさか「泣く」などという行為が、ノーマンの辞書にあるわけが……。

「ハンス」

ふいに呼ばれて、ヘンリーはびくりとした。ノーマンは顔を上げないまま言葉を続けた。その口調は先ほどま

でとはまるで違っていた。

「ここまで話した内容に嘘偽りは一切ない。それはこれから語ることにしても同じだ」

「は——」

「あの日、私の中にある何かが砕けてしまったんだ」

「あの日とは？」

「……エレノアが……撃たれた日だ」

エレノアの命日。結婚式の日。

エレノア・クイン。ノーマンの婚約者にして有力銀行の頭取の娘。そして社交界の華と呼ばれた美しき女性。

「あの日、私の一部が……どこか重要な部分が壊れてしまったような気がするんだ……」。

あの時。

エレノアが撃たれ、花のように宙を舞い、床の上に倒れ込んだ時。私は生まれて初めてと言っていい、言葉にならないものが体の中に充満した。彼女に駆け寄り、事切れていることを知った瞬間の、あのとてもいやな感覚。一体全体あれは何だったのか。ハンス、何だと思う？ 判るなら教えてくれ。

——それが私にまわりついて離れてくれない。

病院に担ぎ込まれてからも、その感覚が薄らぐどころか、まるで澱おろのように体の中に溜おまっていく。

その頃からだ。私はどこかに変調をきたした。会社も

仕事も何もかもが私の中で……そう、隅に追いやられてしまったのだ。なおかつ——面倒くさい、わずらわしいという気持ちが生まれた。それは否定できない。

この五年間というもの、あの時のままなのだ。自分が理解できないままなのだ。なぜこうなったのか」

ヘンリーには、ノーマンが失踪した理由がうっすらと判ってきた。しかし精神科医でもない自分が分析を試みたとしても、相手を納得させることができるかどうか。

「社長、倒れたエレノアに駆け寄ったとき、あなたは生まれて初めて“パニック”を味わったのでしょね」

「パニック……そうか、あれがパニックという状態なのか」

「茫然自失とも言えるでしょうが……」

「君は私じゃないのに、断言できるのか？」

「経験がありますから」

「そうか。経験か」

ノーマンはぶつぶつと独り言を唱え続ける。

それを見ながら、ヘンリーはあらためて目の前にいるノーマンという男の存在に驚嘆していた。語弊があるが、感銘を受けたと言ってもいい。

常に強い意志と信念を持って、何ごとによらず理性的に対処してきた彼にとって、心の混乱など想像すらしたことがなかったのだろう。人の心が判るなどと豪語して

も、彼と自分ら一般の人間の間には、海溝よりも深い溝があつたのだ。

「社長。あなたにはこれまで『もやもやと言葉にならぬ感情』というものは、なかつたのですね」

ノーマンは俯うつむけていた顔を上げると、無言で頷うなずいた。そこには先ほどまでとはうってかわつて、神妙な顔つきがあつた。

ヘンリーは息を吸い込むと、ひと言ひと言ゆつくりとノーマンに語りかけた。

「あなたは、エレノアを愛していましたか？」

「唐突に何を訊く？」

「だいたいなことです」

「当然だ。結婚しようとしていたんだぞ」

「判つてます。そうではなくて。——じゃあ質問を変えましょう。あなたがエレノアとデートしていたときのことを思い出してください。あなたはどんな気持ちがありましたか」

「それは……こう、何というか、つまり、有意義な時間を過ごしているなど」

ヘンリーはまるで子供相手に話している気分がした。ノーマンもふざけているわけでは決してない。必死に言葉を探しているのだ。彼にとって縁のなかつた感情を伝えようと。

「エレノアとの結婚には、どのような意味がありましたか？」

「それは言うまでもない。彼女の実家と姻戚関係を結ぶことで、資金面で強力なバックを獲得することになる。世界戦略になくってはならない重要な布石となるはずだったのだ」

さすがである。この手の話になると流暢にしゃべり始める。

「それでは、結婚式以前に、あなたが関係した女性の数は？」

「そうだな。ざっと二、三十人というところか」

拍子抜けするぐらい、あっさりと答えが返ってきた。

「どれも政略的、打算的な関係でしたか？」

「当然だろう。他に何かがある？」

「判りました」ふと悪戯どころが湧いて「それでは訊ねます。……エレノアの唇の感触はいかがでしたか？」

「な——そんなことを答えねばなんのか？」

ノーマンは怒鳴り返した。その顔はおかしいほど真っ赤だった。

「いえ結構。もう答えてもらったようなものです」

そして、おもむろに付け加えた。

「社長。私は今日ここに来て、ようやく社長の真意を理解することができました」

「ナニ……すると私の不可解な行動が、ハンスには解明できたというのか？」

「はい」

「教えてくれ。私はこの五年間寝ても醒めても、この謎にいたぶられ続けているのだ。頼む！」

ノーマンは必死の形相である。ヘンリーは複雑な思いにかられていた。

ヘンリーが自分の考えを開陳しようと口を開きかけた、まさにその時だった。

ギギギギギ。

高く軋きしむ音が耳じ朶だを打った。

川の流れとは全く異質の、聞く者に不快感を感じさせずにはいない音。

振り向いてみるまでもなく、正体はすぐに判った。

船だ。

荒ぶる濁流の流れに耐えきれなくなったのだろう、船体は傾きをさらに増し、船腹にパツクリと裂け目が口を拡げた。

「ハンス、気をつける、流れてくるぞ！」

ノーマンが言ったとおり、押し広げられた裂け目から、さまざまな物がどつと流れ出てきた。それらは川の流れに従って、こちらにぐんぐん押し寄せてくる。

それは樽だつたり木箱だつたりと、重量のあるものばかりだつた。船の重し代わりに使われていたのかも知れない。

ヘンリーはなすすべもなく呆然と眺めていたが、樽のひとつが、しがみついている樹の幹に激突した。

樹は大きく揺れた。ヘンリーは振り落とされまいよう、さらに力を込めて幹にしがみついた。続いて二つ目の樽が、さつきよりも大きな衝撃でぶつかった。ヘンリーはただ幹や枝が揺れるにまかせるしかなかった。

ドスン、ギリギリギリ、ズズズ。

次々に漂流物が押し寄せる。それを薄目で見つめていたヘンリーは「あっ」と叫んだ。

人だ。人が流れてくる。

服装と体格から、若い船員であることが判った。首と右足があり得ない方向にねじ曲がっている。ヘンリーは目を強く閉じながら顔を背けた。

さいわい、恐れていた衝撃は訪れず、船員は流れ去って行った。ヘンリーが心の中でホツとため息をついていると、

「オイ！」

鋭い声が空気を震わせた。おもむろに目を開けると、ノーマンが激しく腕を振っている。

「ハンス、見る！」

ノーマンの周囲にも細々としたゴミ屑や木材の切れ端などが引つかかっていたが、そんなことにお構いなく、水面を指さしている。

二人の間、五メートルほどの開きのある“海峡”を何やらキラキラ光りながら流れていくものがある。それはペットボトルだった。ペットボトルが太陽の光を反射しているのだ。

中身はミネラル・ウォーター。ヘンリーはこの時に及んで、ようやく喉の渴きを、加えて空腹を感じた。無理もない。昨日は昼食もとらず、午後にノーマンのワインを飲んで以来、何も口にしていなかったのだ。

「あ、あ、あ」

無意識に右腕が伸びたが、高い梢の上からでは届くはずもない。ヘンリーは歯ぎしりした。

「ハンス、樹を降りろ！」

ノーマンが叫ぶ。ヘンリーはその顔を訝しげに見た。降りていってどうしようというんだ。腕を伸ばしてもそう簡単につかみ取りできるもんじゃない。それよりも体を濁流に流される心配が先に立つ。

ノーマンは苛立たしげに言い募る。

「その網だよ。足許を見る！」

そうだった！ この樹が水を切っているあたりに、船から流出した網が引つかかったままなのだ。

水面まで一メートル。ヘンリーはするりと幹を伝い降りると下半身を水中に入れた。白っぽい色をした網はかなり大きなもので軽くはなかったが、躊躇することなく肩に担ぎ上げると、再び樹の上に昇った。ノーマンがさらに言葉を浴びせてくる。

「端っこをこちらに寄越すんだ。両方から網を張れば！判るか？」

「なるほど、ハンモック作戦ですね！」

互いの樹の間に網を張って、漂流物を捕獲しようというのだ。ヘンリーは樹の股を自分の股ではさむ格好になって、肩の網を降ろした。急がねばと逸る心を抑え、網の端を見つけると、右手につかんで、

「投げますよ！」

とノーマンに向かって声をかけた。心なしか声がガラガラになっていた。

ヘンリーは網を投げる加減がつかめず四苦八苦した。ノーマンは相変わらず半身を水に沈めたままである。話をするのに夢中で気が回らなかったが、ノーマンはヘンリーの数倍も大変な体勢で居続けているのだ。

五度目にして、ノーマンの伸ばした腕はうまく網をつかまえることができた。彼は両脚を細い幹に巻き付け、左腕だけで器用に体の方向をコントロールしていた。

網を投げては引き寄せてを繰り返していたヘンリーの

腕と肩は、もうパンパンに張っていたが、それだけに、つらい体勢を強いられていたはずのノーマンが機敏な動作で網を自分の樹に結わえ付けるのに瞠目した。

ノーマンの二の腕の筋肉は大きく隆起し、その輪郭をたどって汗が滴り落ちていた。ヘンリーは知らない人間を見るような印象を受けた。

ノーマンの作業が完了すると、ヘンリーは網を腕に絡みつけて、再び川の中に降りていった。するといいタイミングでいくつかのペットボトルが流れてきて、網の中へ見事に収まった。

「ははは、こんなところで漁をするとは思わなかった」  
ノーマンは自嘲気味に笑った。

「漁をやった経験があるんですか？」

「ああ、アマゾンでは他にすることもないのでね」

網の中にはさまざまな物が漂着した。重量物が流れてきた場合、すぐさま網を引き上げるべく、ヘンリーは目を皿のようにして観察していたが、船の荷崩れも一段落したらしく、その後は細かい物ばかりだった。

“賞品”を手取るには体力を要した。網を伝いながら、まるで水の中で雲梯うんていでもするようにして獲物に近づくのだ。水の勢いは依然強く、流される恐怖と戦いながらの“収穫”だった。しかし苦勞のかいあって、網の中には

ミネラル・ウォーター以外にもソーセイジや果物といった食料が含まれていて、二人を喜ばせた。

ノーマンとヘンリーは交代で収穫作業をおこない、持てるだけの物を手に入れた。一応二人の間は網によって架け橋ができたわけだが、どちらの口からも身を寄せ合おうという言葉は出なかった。じっさいヘンリーの方が大振りの樹ではあったが、二人の体重を背負うのは無理そうだった。

腹が満たされたことで気持ちに余裕が生まれた。その勢いで、互いがセミのように取り付いている樹に名前を付けることになった。

「ニューヨークの——そうだな、ビルの名前がいい」

ノーマンの主張により、ヘンリーの樹は『パンナム・ツリー』と命名された。

「パンナムビルは、二股に分かれたりしてませんよ」

ヘンリーが言うと、

「パークアヴェニューを真つ二つにしてるじゃないかとノーマンは反論した。

「今はメットライフビルに改名しましたが」

というヘンリーの意見は取り上げられなかった。

ノーマンの樹は、

「パンナムビルの近所だから『クライスラー・ツリー』

でいいだろう」  
と、樹のサイズをまったく無視した命名がなされた。

川の勢いは衰えを知らないようだ。

ヘンリーは岸边まで泳げないものかと改めて思案したが、ノーマンに真っ向から反対された。

「甘く見てはいけない。飲み込まれてとても泳げるようなものじゃない。ピラニアだっているんだぞ。もう少し水量が減るのを待つか、救援が来るのを待つのが正解だな」

ノーマンは、パンナムとクライスラーの間に張った網の高さを上げさせた。どうするのかと見ていると、張り具合を調整して本当にハンモックにしてしまい、ノーマンは網の上に笑いながら横になった。状況が状況だけに、ヘンリーはノーマンの脳天気さに言葉もなかった。

「さて、話の続きを聞かせてもらおうか」

太陽が真上に差し掛かった頃、ノーマンがまるで世間話でもするような口調で話しかけてきた。だがヘンリーには判っていた。ノーマンは続きが聞きたくて、先ほどからウズウズしていたことを。

「社長はご自分の意志でニューヨークの病院から失踪し

ました。ところがなぜそうしたのか、根本的な理由がご自分にも判らない。そうでしたね」

「ああ」

「確認させてください。社長はそれまで築き上げてきた業績が、突然自分の中で何の価値も感じなくなった。あれほど世界の頂点を目指して奮闘努力してきたというのに、それがわずらわしくなった」

「……そういうことだな」

ヘンリーはパンナムの股の上で居住まいを正した。

「社長、あなたは気づいておられるのでしょう？」

「気づくって、何を？」

「最愛のエレノアを亡くしたことが、あなたの精神に立ち直りがたい打撃を与えたことを」

「打撃？ もちろん大打撃だった。財界との強力なコネを無くしたのだからね」

「いい加減になさい！」ヘンリーは言葉を荒げた。「あなたはエレノアと出会うことで、生まれて初めて女性を愛することを知ったのです。社長に判る言葉で表現すれば、エレノアはあなたにとって、かけがえのない存在となったのです」

「……………」

「かけがえのない存在は、金銭に換算することができません。比べるものがないのですから。だからあなたは彼

女を失ったからといって、次の女性を探すことなどできなかつた」

「……………」

「人を愛するとはそういうことなのです。いつしかエレノアはあなたの中で唯一無二の“宝石”になっていたのですよ」

「宝石か」

「そう。それまで価値観の上位に君臨していた、お金、名誉、野望といったものを、彼女の存在はいとも簡単に凌駕したのです」

「……………」

ノーマンは白髪を右手でかき上げると、深く頷いた。「あなたはかけがえのない存在を、凶弾によって失った。あなたは最も大切な宝石を失った。おそらくはこれまでの人生で手に入らなかったものないあなたにとって初めて、そして究極の喪失感を味わったはずです。だからなのですよ、あなたが彼女の存在よりも遙かに見劣りする会社やお金といったものに興味をなくしたのは」

最後の方は吐き捨てるような口調になっていた。こんなことをわざわざ説明しないと判らないのか、この男は――。

「しかも犯人がエレノアとあなたを狙撃した原因は、あなた自身にあった」

「私に？」

「そうでしよう。フライパンしか持ったことのない食堂の親父フレッド・モースが、不慣れな拳銃の筒先をあなた方に向けたのは、あなたが彼の土地を奪わんがために、彼の家族を……壊したからなのですよ」

ヘンリーは一瞬こみ上げてくるものを感じて、言葉を詰まらせた。しかし自らを叱咤した。ここで止めてはならない。最後まで言ってしまうのだ。

ノーマンは眼を閉じたまま、じっと耳を傾けている。

「もちろんフレッドの凶行は許されるものではありません。しかしながら彼に引き金を引かせる原因を作ったのは、ノーマン・グリーンウッド、あなたなのですよ！」

ふいに正気に戻ったように、ノーマンは両目を開くと、ヘンリーを仰ぎ見た。

「もう一度言います。あなたはかけがえのないエレノアを失ったことで、仕事に対する意欲も覇気も失った。彼女に比べれば仕事など取るに足りないものに成り下がった。

だから、あなたは逃げた。価値のないものにこれ以上、かかざらわっていたくなかった。かかざらわるのが苦痛になったから」

「……………」

「これが私の分析です。異論がありますか？」

しばしの沈黙があった。その間も川の水かさは減ることもなく、滔々とうとうと流れ続けていた。

「……ハンス、君の分析は正解だろう。君の言うとおりに私にとってエレノアという女性の登場は、奇跡だった。彼女は私を未知の世界へと誘いざなってくれた。三十年の人生で一度も味わったことのない価値観を芽生えさせてくれた。芽生えさせたまま……目の前から消えてしまった。おかげで私はすべてに興味を失った。人生のすべてに」

「……………」

「だから、だから “組織” から逃げて。彼らにとって仕事を放棄した私は無用の長物。反対に裏の秘密を知る人物として生かしてはおけないだろう。消される。だがあの頃は自分の人生に対しても興味を失っていたから、殺されるのもいいかと思った。でも、ハハハ、やはり怖い、怖かったんだ。だから逃げた」

ノーマンは川向こうの密林を眺めた。

「こんなところまで逃げてきた。そして隠れ棲んで五年。そう、船が事故に遭わなければ君を私の隠れ家にご招待するつもりだった。何もないところだけだね。あるのは五年前、病室で手にした雑誌一冊きりだ」

覚えている。ノーマンの失踪とともになくなった、エレノアの特集号。

「社長。あなたはそうして、愛する者を失う痛みを知っ

たのですね」

「ああ。アマゾンに引きこもって暮らしている間、ずっと心中にわだかまっていたものを言葉にすれば、そう表現されるのだな。」

そういえば思い出したよ。学生の頃、同級生たちが女の子の話ばかりにうつつを抜かし、惚れたはれたと騒いでいたことを。私はくだらないと一蹴したが、普通ならあの頃にそんな経験を積むことで、バランスをとる能力を得るのだろうか。……それとも私がエリートとして英才教育を受けたからと、世の人間たちは言うだろうか」

「関係ありませんよ。他のエリートさんたちに失礼な考え方です」

「そうだな。私の持って生まれた資質なのだろう」

ふうとため息をつくノーマン。

「そして君の言い条によれば、エレノアが死んだのは、私の責任である、と」

「エレノアだけではありません。フレッドの家族に対してはどう思うのです？」

ヘンリーは先ほどから胸の動機が高鳴りつつあるのを自覚していた。いよいよ話はクライマックスを迎えつつあるのだ。

「フレッド？ ああ、犯人の名前だっけね。どう思うかと……彼の家族を破滅に導いた責任をかね？」

「フレッドも愛する者を奪われた。あなたと同じなのですよ」

「なるほど。そんなふうに分を他者に置き換えて考えようなどとしたことはなかったが、なるほど、同じだ」  
妙に感心したように言う。ヘンリーは齒がみした。

彼に「思いやり」や「他人の身になって」という観念を理解させるのは無理なのだろうか。そもそもノーマンに理解を求めること自体、ヘンリーの価値観を押しつけることになりはしないだろうか。

いや、そんなことは絶対にない。

ヘンリーは頭を振った。自分は一般人としてごく普通の価値観を持っているはずだ。しかしそれがノーマンに受け入れられないとしたら――。

ここまで来ればもう後には引けない。いやもう今しかチャンスはない！

「社長、私はあなたに言いたいことがあります」

ノーマンは再びゆっくりと顔を上げた。

「何だね。あらたまった口調で」  
いよいよだ。

「私が……私があなたを五年間探し続けたのは、あなたの身を心配してのことではありません」

「……………」

「いえ、ある意味、心配だったことは否めません。もし

あなたがどこかでのたれ死んでいたり、もし誰か別の人間に殺されでもしていたら」

「別の……？」

ヘンリーの胸はさらに高鳴った。

「告白します。ハンス・マグワイヤは私の本名ではありません」

「何だって？」

ノーマンが不審気に眉をひそめる。

「本名ヘンリー・マクファアソン。この名前に聞き覚えはありませんか？ ロンドンの出身で、ドイツには一度も行ったことはない」

「マクファアソン……ロンドン……悪いが記憶にない」

ヘンリーは舌打ちした。やはりノーマンにとって自分は虫ケラのような存在だったのか。

「あなたはイーストエンドの一角に自らの百貨店を建設するべく、一夜にして数多くの住居を破壊し更地にした。直後、現地を訪れたあなたと父君イアンの眼前に、一人の女性が車椅子に乗って現れた」

「車椅子の女性……」

「彼女はあなたに向かって叫んだ。『人殺し！』と」

ああつと、ノーマンが叫んだ。

「思い出したぞ。じつに美しく勇ましい女性だった！」

「彼女の後ろに、青年がいたでしょう」

「ああ、誰かいたな」

ノーマンは記憶の糸をたぐり寄せているのか、頭を反らして空を見上げていたが、

「いた！ 確か二十歳前の若者だったような——」

「それが私です」

ヘンリーは言い放った。

「あれが君……本当か？」

「あなたはあの街を一夜で潰した。立ち退き反対運動の急先鋒だった母と、風邪で寝込んでいた父がいると知りながら、家もろとも破壊した。父母は死に、姉は歩けないう体になった。」

学校の寮にいて無事だった私は、車椅子の姉と共に復讐を誓い、再捜査を依頼するため、警視庁ヤードに日参した。ところがそんな動きが目障りだったあなたは姉を自殺に見せかけて殺害した。私の命も狙われたが、どうにか生き延びることができた。

私は国内にとどまるのは危険だと感じ、ニューヨークに逃げた。入国すると同時に名前を変え、流通業界へと身を投じた。それはあなたに少しでも近づくためだった。あなたへの復讐の第一歩だった。いつか力をつけたらイギリスへ逆上陸しようと狙っていた。ところが驚いたことあなたの方から海を渡って近づいてきた。しかも私の会社を買収してくれたじゃありませんか。

以後はご存じの通りです。私はあなたの秘書にまで昇りつめた。あなたの右腕となった。いつでもあなたの命を奪うことができる。そう思った」

遠くで水の跳ねる音がした。濁流に洗われて、土手が崩れたのかもしれない。

「——しかし私は考えた。どんな復讐の方法があなたに對して最も効果的なのか。どうすれば私が、私と姉が、父や母が受けた苦痛と同じ、あるいはそれ以上の苦痛をあなたに与えることができるのか。流通業界で何年も過ごしたことで、物事を冷静に、計算高く考える習性がついたようです。

——暴力的な行為によつて、即座に命を奪うか？

——全財産を残らず没収してしまふか？

しかし私には決断ができなかつた。

前者の方法は、フランクとティムの二人が常にあなたのそばにいたから。後者の方法は、じっさいにうまくいく算段がつかかなかつたから。

ふんぎりがつかないまま、ぐずぐずしているうちに、あなたはフレッドに撃たれ、入院を余儀なくされた。

もう今しかない。そう思った私は、今度は自分が刺客となり、病室であなたの命を奪つて本懐を遂げようと考えるに至りました。

ところが直前であなたは失踪した。この五年間、私が

どんな気持ちでいたか、あなたには想像できないでしょう。私は気も狂わんばかりにあなたの行方を捜した。それは会社の意向ではなく、私個人の復讐のためです。あなたがすでに死んでいたり、他人の手で殺されたりしては、私のこれまでの苦労が水泡に帰してしまおう。存在理由がなくなってしまう。判りますか？」

ヘンリーは腰に巻いたポーチのファスナーをおもむろに開いた。そして黒光りする一物を右手でつかむと、目の高さまで持ち上げた。

ついにここまで来た！

「私は——こうしてあなたの命を奪う——あなたは苦痛に顔を歪めて死んでいく。そのためにここまで来ました。もう迷いません。覚悟してください！」

叫ぶと同時に、銃口をノーマンに向けた。しかし右手の震えが止まらない。ヘンリーはハンモックの上で体を起こすと、クライスラーを左手で握りしめた。

ヘンリーは銃を構えたまま動かない。冷や汗がこめかみを伝って頬へと落ちる。

ノーマンも微動だにしない。

川のうねりは変わらずゴウンゴウンと工場のような音を響かせている。

鳥だろうか、遠くで動物の鳴き声が出た。

ヘンリーは目の中に入った汗を、手の甲でぬぐい、す

ぐに銃を構えなおした。ノーマンはじっとヘンリーの顔を  
を厳しい顔で見つめている。

ヘンリーが再び汗をぬぐった時、予想もしなかった言  
葉がノーマンから返ってきた。

「撃つていいぞ」

「えっ？」

ヘンリーは照準から顔を上げた。

「撃てばいいんだよ、早く」

「……………」

「君の気持ちはよく判った。いや……安直に判ったなど  
と言つてしまつては、ここまで私を追つてきた君に対し  
て失礼かな。ヘンリー・マクファアソン君」

言うとなーマンは、クライスラーを背に、両手を頭の  
高さに挙げた。

「私は確かに君の姉さんにご両親を殺めた。君には私を  
撃ち殺す正当な理由がある」

そうだ、その通りだ。ヘンリーは頷く。

「さあ、今こそ積年の恨みを晴らせ。撃ちたまえ！」

ヘンリーはノーマンの言葉に操られるかのように、銃  
を構えなおした。

引き金にかけた指までがじつとりと汗ばんでいる。銃  
口の先にはノーマンの胸が、的はここだと言わんばかり  
に掂げられている。

撃て、撃つんだ。引き金を引け。それで長きにわたる追跡もジ・エンドだ。暗いトンネルから抜け出すことができるのだ。

「……………！」

密林の方からやけに動物の声がする。ああそうか。嵐が過ぎ去ってようやく動物たちも巣に戻って来れたのだな。それにしてもうるさい鳴き声だな。いったい何匹いるんだろう。いや何万匹、何億匹かな。なにせ人間の足が踏み入ったことのない場所の多いアマゾンだ。誰も知らない種の動物や昆虫、ひよつとすると怪物もどきの生き物だって棲息しているかもしれない。宇宙にまで行こうという時代に、まだ足許すらはつきりとしなないなんて不思議な話だ。まあ我が祖国だって、いまだにネッシーがいるのいないのと議論されてるぐらいだからなあ……………。

キーーーーーッ。

突如、空気を切り裂く悲鳴が、あたりに<sup>こだま</sup>に響いた。ヘンリーはのけぞるように背後の密林に首を傾けた。音源は明らかに緑の木々の向こうから聞こえた。その一声は、極限まで緊張感を高めていたヘンリーの頭に、恐怖という冷や水を浴びせかけた。

キキキキーーーーッ。キーーーーーッ。

今度は川の反対側から声があがった。

奇怪な声はその数をどんどん増やし、いつしか森全体が合唱し始めた。ヘンリーにはまるでファンタジーの世界のように、森の一本一本がおぞまじげな声を発し始めたように思えた。

声は鳴りやむどころかますます大きくなる。ヘンリーは銃を持ったまま、両手で耳を覆った。怪物の声はそれでも隙間をこじ開けるように忍び入ってくる。

やはりここは人間の来る場所ではないのだ。ジャングルのど真ん中に都市を築いたり、アマゾン川の支流の奥まで大きなモーター音を鳴らして分け入ったり――。

そんな無神経で無節操な行いが、眠っていた怪物を揺り起こしたのだ。怒りにかられた怪物が牙をむき、声を限りに咆吼し、自分を飲み込もうとしているのだ。

「――！」

かすかに人の声が聞こえた。ヘンリーは耳を塞いだまま薄目を開くと、自分に向かって叫んでいるノーマンの顔が近くに見えた。

「――だ」

「何ですって？」

「あれは猿だ。猛獣でも何でもない！」

猿――ただの猿？

すぐには信じられなかった。しかし勇気を奮い起こすと密林の木々の間に視線を泳がせた。

鋭い鳴き声とともに揺れる森。ヘンリーはそこに、いくつものうごめく動物の姿を認めた。

「猿……」

「そうだ。赤いハゲ面をしてるだろう。ウアカリだ」

「ウアカリ……」

まだ動揺の静まらないヘンリーは鸚鵡返しに答えるばかりだった。

「あれはシロウアカリって奴だ。ご覧の通りの真っ赤な顔で禿頭、目の上の瘤こぶ、そして体を覆う白い毛。遠目には小さな老人って風貌だな。あんまり人目につかない連中で、学者先生には非常に興味深い種類らしい」

ウアカリたちは、川の両側で叫び合っている。まるで大声で話し合っているように。

「嵐でこのあたりが水の下に沈んだとき、おおかた家族が生き別れにでもなったんだろう。天気が回復したんで戻ってきたという感じかな」

ヘンリーはただ呆けたように聞いていた。正体が猿と知っても、まだ体の震えが止まらない。

「川の流れもずいぶんゆるやかになってきた。動物たちもそれぞれ自分のなわばりに戻ってくるだろう。そうなのとちよつとヤバいな……。さて、ヘンリー」

呼ばれて体がビクツと反応した。

「どうした。撃たないのか？」

「な、ナニ？」

ヘンリーは銃を構えなおしたが、どうにも腕に力が入らない。

「早くしないと、また逃げちまうぞ」

そうはさせない！　ここで仕留められなかったら大きな後悔をするだろう。

もう自分は躊躇しないことに決めただ。人を撃った経験などないが、頭の中では何度もシミュレーションしたんだ。大丈夫。自分にはできる！

しかしそれでも心のどこか奥底で、しきりに自分に向かって叫んでいる声があった。違う、何かが違うぞ、と。何なんだ？

ああ、猿どもの鳴き声がうるさくて考えられない。

「撃たないなら、こちらから行くぞ」

ノーマンは素早い動きで背筋を伸ばすと、ズボンのポケットに片手を入れた。

——ま、まさか、彼も武器を持っていたのか？

「うわああああああ」

パンッ。

銃声が轟いた。

ヘンリーの銃がついに火を噴いたのだ。

ウアカリたちの声がやんだ。と、これまでよりさらに激しい鳴き声が川面を響き渡り、やがて少しずつ遠ざ

かつていった。銃声に驚き、逃げ出したのだろう。

一、二分もするとまた川の音しか聞こえなくなった。

ヘンリーはようやく幹にくっつけていた顔をはがした。

ノーマンは――。

「ううう……へたくソ！」

彼は苦痛に顔を歪めていた。ヘンリーの銃弾が貫いたのはノーマンの胸板ではなく右の太股だった。流れ出した血はズボンをしたたり、そのまま水面に流れ落ちていく。

撃った。撃ってしまった。

ヘンリーは何度も何度も口の中で繰り返して呟いた。

今日という日をどれだけ夢見たことか。

しかし、ヘンリーの心にはいつこうに喜びも達成感も湧いてこなかった。その代わりに感じたのは……。

苦痛。まるで自分が撃たれたような痛み。

そんなバカな。

「おい……ハンス……もう一度撃て……今度はちゃんと心臓を……」

ノーマンの体がグラリと傾いた。そして川の中に頭からザブンと落ちた。

「ノーマン！」

ヘンリーは叫びながら、転げ落ちるようにパンナムから飛び降りた。そしてノーマンの行方を追って、水の中

に飛び込んだ。

ノーマンは流されてはいなかった。網に片足が引っかかっていた。

ヘンリーは素早く銃をポーチに仕舞うと、両手の指を網にかけ、ノーマンのところへと近づいていった。

ノーマンは半ば気を失っていた。頬を叩いても要領を得た反応は返ってこない。ヘンリーはひとまず彼の体を水から引き上げた。

流速が落ちたとはいえ、足の届かない川の中である。さんざん苦労してハンモックの上に座らせるときには、ヘンリーも頭の先まですぶ濡れになっていた。

「社長、しっかりしてください！」

耳元で怒鳴ると、ノーマンの目がうつすらと開いた。

「……やあ、ハンス。いや、ヘンリーだったか……自分で撃っておきながら、しっかりはないだろう」

「いえ、しっかりしてもらわないと困るんです」

ヘンリーは自分自身もハンモックの上に並んで腰掛けた。

「——しゃべらないでください。いま止血しますから」  
そう言って、漂流物に混じっていたタオルを拾い上げると、ノーマンの太股に巻き付けた。

「ここから脱出するまでは、一人より二人の方がいいことに気づいたんです。社長にはまだしばらく生きていて

もらいますよ」

ヘンリーはタオルを縛りながらそう言ったが、自分でも自分が判らなくなっていた。ノーマンは何も応えず、されるがままだった。

体力が回復するまで、ヘンリーはノーマンを抱きかかえるような格好でハンモックの上に腰掛けていた。重みでクライスラーがたわみ、二人の尻が水に浸かってしまう。あまり気持ちのいいものではない。

どこか近くでドボンと水の撥ねる音がした。土砂崩れはまだ収まっていけないのだろうか。

ヘンリーはたわわに葉の茂るパンナムを見上げた。とりあえずあそこに引き上げて休ませるしかなさそうだ。

しかしその前に……。

ヘンリーは苦しそうに肩で息をしているノーマンのポケットをまさぐった。何か棒状のものが入っている。引っ張り出してみると——入っていたのは一本のソーセージだった。

「社長、私を騙だましたんですか？」

「……ふんぎりのつかない君にしびれが切れてね」

ノーマンは汗だくの顔でにやりと笑った。

ヘンリーはただ顔をそむけるしかなかった。この男は自分に撃たせたかったのか。撃たれたかったのか。

なぜ……。

うつむいて自問自答していると、ふいにノーマンがヘンリーの肩を小突いた。

「思ったとおりだ。本当にヤバイ連中が帰ってきたぞ」  
ノーマンの視線は、はるか岸辺の方角を望んでいた。  
つられるように目をやったヘンリーは全身の毛が逆立つほどの驚愕を覚えた。

川面を、いびつな形をした生き物が、静かに近づいてくる。

ワニだ！ その数はゆうに十匹はいる！

「どうやら私の流した血が呼び寄せたみたいだな」

ノーマンはまるで他人事ひとごとのように呟く。ヘンリーはあわててポーチから拳銃を出すと、ノーマンに言った。

「とにかく樹の上に昇ってください。私がここでくい止めます」

ところがノーマンは異を唱えた。

「その役目は私がやる。君が昇りたまえ」

言うが早いか、拳銃を取り上げると、先頭を切つて近寄ってきた一匹の鼻面めがけて引き金を引いた。

銃弾は狙い違わず、先頭のワニの目を貫き、撃たれたワニは弾かれたように、水上にその姿を現した。

黒くいかつい皮膚。鋭い歯。こいつらと自分たちの間に動物園のような“檻”は存在しない。

撃たれたワニは白い腹を上にして、ふかりと水面に浮かんだ。と見る間に周囲にいたワニたちが、われ先にと死んだワニに噛みつき始めた。

「こいつら、よっぼど腹を空かせているらしいぞ」

さらにノーマンは別のワニに銃弾を浴びせた。その狙いは的確で百発百中だった。撃たれたワニは次々に倒れ、そばのワニどもに喰われる運命となった。

それでも野生の爬虫類たちは攻撃をやめようとしないういや最前よりもますます数が増えている。

「私はこのワニという奴が大っ嫌いだね。コイツの歯に引き裂かれるくらいなら、毒でもあおった方がマシだ」  
やがて引き金が空しくカチリと鳴り、弾が尽きたことを告げた。

「まさか、他に弾は持ってないんだろうな」

「……ありません」

「じゃあ早くパンナムに昇れ！ 急げ！」

ヘンリーは言われるままに駆け上った。そして、

「社長、つかまって！」

伸ばした腕がノーマンを引き上げた。

「ふーっ、ぎりぎりセーフだな」

しかし軽口を叩いている暇はない。威嚇のつもりか、ワニどもは大きな顎あごをこれ見よがしに開きながら、二人のいる樹に鼻面を叩きつけてきた。

「うわっ」

その衝撃は、重量オーバーの樹を振り子のように揺さぶった。二人はしがみついているのがやっとなった。

「こ、これまでかもしれんな、ハンス」

ノーマンの声は怯えた色を含んでいた。ワニの餌食になった自分の姿を想像しているのか。

ヘンリーは——まだあきらめていなかった。こんなところでは死ねない。自分はまだ死ぬわけにはいかない。

パーンッ。

どこか遠くで射撃の音がした。

「あれは——救援隊ですか？」

「いや……違う、あそこ」

揺れる視界の中でノーマンが指さしたのは、座礁した船の方角だった。

パーンッ。

また音がした。今度はずっと近い。

「何だあれは……ボートだ、こっちに来る！」

それは予想もしなかった“助け船”の出現だった。二人はただ接近してくる白いボードを見つめるだけだった。

「船に備え付けのボートだ。……あれはタイムじゃないか！」

そう。ボートの上から銃でワニどもを蹴散らしている小柄な男は、間違いなくタイムだった。

「生きていたのか！」

二人は揃って歓喜の声をあげた。

ボートは速度をゆるめることなく迫ってくる。手漕ぎ式の小型ボートだ。ティムはオールを握ることなく、ひたすらライフル銃を撃っている。狙いは見事なもので、三匹、五匹とワニが倒れていく。

「ティム！」

ボートはスピードを落とさないうまま、パンナムの脇をすり抜けようとしたが、そこには張ったままの網があった。ボートは網に絡め取られるように急停止した。

「ティム、大丈夫か！」

二人は体をひねって網を見やったが、その時にはティムはもう体勢を立て直していた。さすが長年ノーマンのボデイガードで鳴らしただけのことはある。

彼は横倒しになったボートの縁に片膝を乗せると、二人の方を振り向きもせず、ライフルでワニを撃ち続けた。その姿はあたかもプロのスナイパーのようで、表情一つ変えず、ただ機械的に撃ち続ける。

いつしかノーマンもヘンリーも、声をかけることを忘れて、ティムの射撃の技に見入っていた。

やがて生き残ったワニどもは、かなわないと知ったのか、ほうほうの体で逃げていき、川は平和を取り戻した。「ティム、よくやってくれた！」

ノーマンが手を振った。

タイムもようやく頭を下げてそれに答えた。……とそのまま前のめりに倒れてしまった。

「どうした？」

あわててノーマンが水の上に降りる。続いてヘンリーも。

そばに寄った二人は愕然とした。タイムは口から血を吐いていた。ノーマンが抱きかかえるようにタイムの体を起こすと、

「おい私だ、何があったんだ？」

タイムは口のまわりを真っ赤に染めながらも、満足そうな表情を浮かべた。そして両手をノーマンの目の前にあげると、手のひらを動かし始めた。

「——手話？ タイムは手話ができたんですか？」

ヘンリーが驚きの声を上げると、ノーマンは平然と、「ああ、ずっと前からね。周囲に他の人間がいないとき、我々はいつも手話で意志の疎通を行っていた。秘密にしていたのは防犯上の理由からだ。手話は遠くからでも会話の内容を読みとることができるからね」

タイムは瀕死の重傷を負っている。なのに彼は無謀にもノーマンたちのピンチを救おうとした。いま彼はヘンリーがいるにもかかわらず、秘められた会話手段で何とかをノーマンに伝えようとしている。自分が助からな

いことを知っているのだ。

タイムが語る内容を、逐一ノーマンが翻訳した。

「……船が転覆して以来、自分はずっとあの中にいた。……ひどい骨折を負っていたので、動くことはほとんどできなかった。……銃声を耳にし、傾いた床を這って船べりに移動し、欄干越しに下流を見やると、ワニの大群に囲まれた私たちを発見した。……すぐ船室にとって返し、ライフル銃と弾をつかむと、ボートを引きづり出して飛び乗った。——そうか、お前には無茶をさせたな」

タイムはさらに手を動かした。ヘンリーが、

「いま、なんと？」

と問うと、

「——私の仕事だから、と」

ヘンリーは味わったことのない感銘を受けた。ノーマンのような男に、おのれの命を捧げようという人間がここにいる。

ヘンリーは複雑な心境に沈んでいく自分を自覚していた。もしもタイムがヘンリーのノーマン搜索の理由を知れば、彼のライフルは、ワニの次にヘンリーへと向けられたことだろう。

ごほつ。タイムの口からさらに血があふれ出た。おそろくは折れた肋骨が内臓を破ったのだ。

「もういい、休め」

しかしティムは手を動かすのをやめない。まだ伝えた  
いことがあるようだ。

「……船の中には……ナニ？ フランクもまだ生きてい  
ると！ ……彼は首の骨を折っていて、少しでも動かす  
と命にかかわる。……他に生存者はいない。……救難信  
号を出そうにも、機器はすべて水に浸かってダメだった  
と。——そうか、よく知らせてくれた。——よく私たち  
を救ってくれた。無理をさせて済まなかった。礼を言う  
ぞ」

そのとき、ティムが初めて笑顔を見せた。

それが彼の最期だった。

ティムが息絶えるのに呼応するかのように、網を支え  
ていたクライスラー・ツリーが折れ、ボートは川に押し  
流されていった。残っていればこの地を脱出するのに役  
だったろうに、かえすがえすも残念だった。

夕刻、ティムの亡骸は川に流した。あとにはライフル  
銃と十分な数の銃弾が残った。

二人は二度目の夜を迎えた。

ノーマンの右股の銃創は、弾丸が貫通していたことも  
あり、その後はひどく流血することもなかった。ただ夕  
方から少し熱を出したので、ヘンリーは彼をパンナムの

樹上に縛り付けて介抱した。

ワニは恐れをなしたのか、あれ以来姿を見せず、猿の鳴き声もしなかった。

陽が暮れた頃、ノーマンの熱が引いた。二人は、とりあえず救援が来るまでここにいるしかないと意見を一致させると、それまでどうやって過ごすかを検討した。その結果、一人はヘンリーがずっと過ごしていたように、パンナムの二股になった場所に腰を据える、もう一人は網を樹の股にぐるりと巻いてハンモック状に吊し、そこに陣取る。時間を決めて居場所を交代し、樹の上で寝ている間は、ハンモックにいる方がライフルを構えて見張りを勤めることになった。

二人は昼間に獲ったソーセイジやミネラルウォーターで飢えをしのぐと、こぼれんばかりの星空を見上げながら、どちらからともなく相手に話しかけた。

もちろんヘンリーは、そばにいるノーマンが親と姉の仇であるという意識を捨てたわけではない。ただ、今のノーマンを撃つたところでしょうがない、そう思っているだけである。

ヘンリーはあらためて問うてみた。

「あの時なぜ、自分を撃てと言ったのですか？」

「……昼間にも話したように、私はエレノアを失って以

来、生きる望みをなくした。すべてに興味を失い、魅力を感じなくなった。いつそ死んでしまえと何度思ったとか。でも死ぬなかつた。死ぬのは怖い。いや、死に伴う痛みや苦しみが怖いのだ。ただそれだけだよ。笑えるだろう？ 怖いものなしだった私が。

でも君を前にしたとき、ああ君に撃たれるのもいいなと思ったのだ。君には私の思いの丈を聞いてもらえたと、たひこれでもう思い残すことはないからね」

ヘンリーは——落胆した。

死ぬたがる相手を撃つたところで、敵討ちといえるだろうか？ 自分が受けたのと同じ恐怖、同じ苦痛を与えた上で命を奪うのでなければ意味がない！

もしヘンリーの撃つた弾丸が、ノーマンの太股でなく、心臓を貫いていたら……。ノーマンは満足そうな笑いを浮かべながら死んでいったのか？

——そんなもの、何の意味もない！ 少なくとも自分にとつては。

遠く離れた座礁船の舳先を、夕暮れの残光が朱に染めていた。ヘンリーはそれを眺めながら、先日新聞で読んだ、奇妙な犯罪者の話を思い出ししていた。

——世の中がつまらない。死んでしまいたい。それなら誰かを道連れにしてやろう。そうすれば自分が世の中に対して抱いている気持ちが残せるだろう。彼は自分の

考えに従い、官憲に逮捕されることを目的に大量殺人を起す。被害者は犯人とは無関係の人々だった。犯人はこれで気が済んだとばかりに、ぐずぐずしないで早く自分を死刑にしると、再三要求をつきつける。

……そんな人間の命を奪ったところでどうなる？

犯人は最期まで反省の色を見せないまま、電気椅子の洗礼を受け、お望みどおりにあの世へと旅立った。

被害者の遺族は、癒されない悲しみとやり場のない怒りをかかえたまま、人生を歩んで行かねばならない。

満足げな顔をしてるのは、司法当局や官憲のお偉方だけ。

これじゃまるで犯人のやり得じゃないか！

いや——。ヘンリーは広がりすぎた考えを元に戻そうと、左右のこめかみを両手で叩いた。

黒い皿の上に砂糖をばらまいたように、果てしなく拡がる夜空が、ジャングルの夜を今夜も美しく演出している。座礁船ですら月の光を受けて、まるで不時着した宇宙船のように見える。

「フランクはまだ生きていますでしょうか？」

問うでもなく声に出すと、樹上のノーマンは、

「さあな。彼はタイムの数倍頑丈だが、重傷で身動きもできないんじゃない、生きている見込みは薄いだろう」

わずかにため息が混じっていた。

「社長、フランクとティムは『組織』が派遣したんですよね？」

「そうだ」

「なのはどうして二人は『組織』を裏切った社長の逃亡に手を貸したのですか？ いやそもそも『組織』とは何なのですか？」

「……当然の疑問だな。まあいまさら隠し立てする必要もあるまい。『組織』は、旧ナチの残党なんだよ。二人はナチ残党の末裔だ」

「ナチですって？」

ヘンリーの声は裏返ってしまった。二十世紀も終わりに近づいたという現代に、その名を耳にするとは予想だにしていなかった。

「そうだ。あのナチだ。説明するまでもあるまい。ドイツ敗戦後、彼らは戦犯として裁かれるのを恐れ、国外逃亡を画策した。多くは捕らえられたが一部は首尾よく落ち延びた。残党の多くはこの南米の地に足を踏み入れた。聞いたことはないかね？」

「『オデッサ』くらいなら耳にしたことが」

「そこまでポピュラーじゃない。彼らの存在はこれまで一度も表立って話題にされたことはなく、知る者はほとんどいないらしい。らしいというのは私にも判らないか

らだ。名称だつて特になく、単なる “組織” としか呼ばれていない。ボスが誰なのかも知らないし、どれほどの規模を持っているのか皆目検討がつかない。ただ、ティムから聞いた話だが、本部はこのブラジル、それもアマゾンにあるらしい」

「何ですって？ それじゃなぜ……」

「ことわざに言うじゃないか。灯台もと暗しつてね」

呆氣にとられるヘンリーをよそに、ノーマンは続ける。「確かに相手について何も知らないまま、懐に飛び込もうというんだから酔狂な話ではあるな。フランクとティムも当初は難色を示したが、ブラジルは彼らの出身地でもあつてね。土地鑑があるという強みもあり、最終的には説得することができた」

「しかし “組織” の家族でもある彼らがなぜ」

「フランクもティムも若かった。君とは同年輩だったな。若い彼らにしてみれば “組織” に縛り付けられる不自由さに嫌気がさしていたようだ。」

“組織” の最終目標はもちろんナチの復活だ。その資金稼ぎのために世界中のこれとにらんだ人物に近寄って、ビジネスを持ちかける。裏の世界を通じて強力にバックアップする代償として利益の一部を寄こせ、とね。

第二次大戦は古い過去の話だ。ナチ復活にしる時代錯誤も甚だしい。ニューヨークという大都会の自由な空気

を吸えば、二人が“組織”に疑問を感じたとしても無理からぬことだ。

病院で二人を説得し。私たち三名はすぐさまこの南米に渡った、というわけだ。君には手紙でも置いていきたかったが、足がつくことを恐れてね。済まなかった」

「もしや社長は、ハンスというドイツ名から、私が“組織”の新たなお目付役とでも疑ったのでは？」

「ハハハ、どうかな」

翌日の昼どきになっても、救援隊の姿は影も形も見えなかった。事故からすでに四十五時間が経過している。

そろそろ発見してくれても良さそうなものだ……。暑さにうんざりしながらも、ヘンリーは川の上から目を離さなかった。

午前中にワニが二、三匹周囲をうろついたが、銃弾を見舞うと、そそくさと逃げていった。

わずかな食料は底を突き、ペットボトルの水も残り少なくなった。このままでは餓死するしかない。

「この川はできたばかりだ。捜索の目が届かないでいるんだらう」

そんなノーマンの分析も、ヘンリーをいたずらに苛立たせるだけだった。

夕刻、垂らした網の中でぐったりしていると、思わぬプレゼントが届いた。上流から転がるように黄色い果実が流れてきたのだ。

それはカカオだった。黄色い皮をむくと中から白い果肉が出てきた。かじると甘味が口の中に広がった。数珠つなぎに流れてきたところから推して、船倉に詰めていた箱が荷崩れを起こしたのだろう。

「これはうまい。生き返るな」

二人は久しぶりに、体に力がみなぎるのを感じた。

三度目の夜が訪れた。

ヘンリーは今夜もじっと星空を見上げている。Tシャツも膝上の短パンもあちこちが破れ、その下の皮膚も傷だらけだった。疲労が蓄積した体も重い。それでも頭の中はすっきりと冴え渡っていた。カカオの効果かもしれない。

「社長」

「うん？」

「そろそろ動くべきだと思います」

「……………」

「あと二日もこの状態が続けば、私たちは干上がってしまい、動けなくなるでしょう」

「……………そうだな」

「脱出するなら明日です。明朝、脱出作戦を実行しませんか？」

「作戦か。何か秘策でもあるのか？」

ヘンリーはハイと答えると、胸の前で腕を組んだ。

「泳いで渡るんです。最短距離の岸边まで一直線に」

「バカな！ ワニの餌食になるだけだ」

「泳ぐのは私か社長のどちらか一人です。もう一人はここに残って、泳ぎ手に近寄るワニを撃つんです」

「なるほど、援護射撃か」

「そして渡った方が救援を呼びに行くという寸法です」

「……………」

「いかがですか？」

「悪くない考えだが——」

頭の上の暗がり、ノーマンが身じろぎした。

「どちらが泳いで行くんだね？」

「朝までに決めましょう」

ノーマンが笑い声を漏らした。

「君のことだ。その先も検討済みだろうか？」

「一応は」

「フフフ、もったいぶるじゃないか。それなら私が答えてやろうか。」

まず私が泳いで渡る場合。うまく岸边にたどりつけば、ジャングルの中とはいえ土地鑑のある人間だ、人里を探

し当てる自信はある。だが問題点が二つある。一つ目はこの脚だ。体重を支えて長距離を歩くのは無理だろう。二つ目は援護する君の射撃だ。ライフル銃など扱った経験はあるまい。となると援護してもらえるかどうか。下手をすれば私の背中に穴が開く。もつとも敵討ちの目的は達成されるわけだが……」

ノーマンはわざと話を中断させると、枝に吊したペットボトルの水をぐいと飲んだ。

「さて逆に、君が泳ぎ渡る場合。私より若い君のことだ。成功率は高い。そして私は射撃の腕に自信がある。そこまでの話なら、こちらの組み合わせを選択するのが妥当だろう。ところが問題点。君はアマゾンを全く知らないときた。いきなりジャングルに入っては、道に迷ったあげくに、のたれ死ぬか、猛獣の餌食になるのが関の山だろう。それ以前に、もし私が泳ぐ君を背後から撃つたりしたらどうする？」

「ありがとうございます。問題点を浮き彫りにしてください。さつて」

間髪入れず、ヘンリーは答えた。

「どちらのオプションを採用するかは、明日決めましょう。でも明日、決行することだけはOKしてもらえませんか？」

「いいだろう。君がそこまで主張するなら」

ノーマンはあつさりどゴーサインを出した。

ヘンリーも軽い口調で、

「朝になったら、マナウスまでの地図を書いてください。私は子供の頃から初めての町でも平気で歩けるぐらい、勘のいい子だったんですよ」

するとノーマンも負けずに、

「君には銃でワニどもを脅して一列に並ぶよう命令してもらおうか。私は奴らの背中を渡っていくよ」

また流れ星が一筋、空に軌跡を描いた。

「社長、質問があるのですが」

「今度はなんだ？」

「あなたは元秘書であるアラン・ベネットを消すよう、  
“組織”に依頼したのでしたね。私を手許に置くため」

「ああ、昨日話したとおりだ」

「あなたは今でも自分の行いが正しかったと信じていますか？」

「……………」

ノーマンの答えはすぐに返ってこなかった。ヘンリーは忍耐強く次の言葉を待った。やがてノーマンは口を開いた。

「私は一生をかけて一枚の絵を描こうとした。地球のと同じ広さを持つキャンパスの上に。それはかつてどんな

芸術家も描き得なかった大作だ。この世のありとあらゆるものがそこに描かれる予定だった。

完成の暁には、描かれたすべてが私の構想したレールの上を走ることになる。人間も動物も商品も芸術作品も情報も思想も、すべて一切合切だ。何もかもが世界中を流通する。海を越え国境を越え、人種を越え民族を越え、偏見も迷信もすべてを越えて！

その先にこそ真の世界平和がある。

私はそんなグラウンド・デザインを一人、頭の中に掲げた。そしてこの絵を完成させるため、私は帝王学を学び、イギリスの流通業界に革命を起こし、さらにアメリカでの成功を足がかりに全世界に飛び出そうとした。

いいかね、計画とは大きければ大きいほど、小事にかまっついては完成しないものだ。だから私は必要とあれば法に触れることだって躊躇なく実行してきた。なぜか？ 必要だからだ。私は必要ない行動は一切とらない。街を破壊したのも、人を殺したのも、すべて私の中では正当な理由があつてのことだ。

歴史を振り返ってみたまえ。いや現代の地球を眺めるだけでもいい。為政者は敵味方を含め何万という兵士や住民たちの死によって領土を確保し、利権を守り、おのが野望を実現してきた。そう、野望すなわち理想の前には人間の命は平等ではないのだ。

理想を實現できる力を持つ者は、法に縛られず、人倫の道を気にもせず、おのれの価値観だけを頼りにして、何ごとも決断していいのだ、行動していいのだ」

ヘンリーは五年ぶりに聞く弁舌にただ圧倒されていた。

「——ところが、ところがだ」

ノーマンは荒くなった息を整えるため、ペットボトルの水で喉を潤した。

「<sup>ひっせい</sup>畢生の大作である我が絵に、ある日、見たこともない極楽鳥が描き添えられていたじゃないか。極楽鳥は美しい翼とくちばしを持ち、じつに妙なる声で鳴いた。

それが、エレノアだった」

ノーマンのトーンが変わった。

「初めは単なる点景だった極楽鳥は、気づかないうちに、中心に位置を占めると、美しい翼を大きく拡げた。私はそれでもいいと思った。彼女の存在価値は、持っているバックボーンだけでなく、私に箔を付けることでもある、私はそんなふうに認識していた。……ところが、彼女がいなくなった途端、どうだ。何年も苦労を重ねて描いてきた絵が、ドロドロに溶け出し、しまいには一片の反古<sup>ほご</sup>と化してしまっただのだ。

私はいやでも知らされることになった。エレノアこそが「<sup>たましい</sup>絵」の魂<sup>たましい</sup>だったのだと——。

ハンス、いや、ヘンリー」

うつむいていたヘンリーは顔を樹上のノーマンに向けた。彼の表情は影になって、よく見えなかった。

「愛する人を失うとは、とどのつまりこういうことなんだな。まるで自分の肺腑はいふをえぐり取られたような気分と  
いうか」

「……そうです」

ヘンリーは力強く頷いた。ノーマンの言葉が続く。

「私も芸術を理解する人間だ。想像力はあるつもりだ。

だから——昨夜、君の話聞いてからずっと考えていた。私が消した人間を愛していた者がいたら、その者は私と同じ気分を味わったのだろうか？　これほどひどい絶望感を味わったのだろうか？」

「当たり前です！」

ヘンリーは叫んでいた。いつしか両眼にいっぱい涙を溜めながら。

「フレッド・モースもか？」

「もちろん」

「君もか？　ヘンリー・マクファアソン」

「……」

ヘンリーは答えられなかった。堰せきを切ったようにあふれ出した涙をぬぐうので精一杯だった。

「——私はもっと早くエレノアと出逢うべきだったよ」  
その時、ヘンリーのうなじに一滴の熱い水が落ちた。

それこそヘンリーが一番求めていたものかもしれない。  
ノーマンの涙を。

「社長」

「……………」

「私もひとつ告白したいことがあります」

「なんだね」

「元秘書のアラン・ベネット。彼の死には私も責任があります。あの日、彼は私の目の前で轢き逃げされました。……ところがそれでも彼にはまだ息があったのです。私は救急車を呼ぼうとしました。ところが……あなたの言葉を思い出してしまったのです。アランがいなくなれば私があたなのそばに行くことができます。復讐に一步前進できると考えて。そして……愚かにも私は気を失っているアランを、路地へと引きずり込んだのです。……翌日、彼は凍死体で発見されました。だから、だから私は、殺人の共犯者です……」

ヘンリーは唇をかんだ。

「——私も自分の野望、仇を討つという目的のために、他人の命を踏みにじりました。だから私にはあなたを責める資格はありません。」

このことを今日まで私は深く考えないようにしてきました。自分の中に矛盾があることを認めなくなかった。逃げていたのです。それでも心のどこか奥底がしくし

くと痛んでいた。平気じゃなかったことが唯一の救いで  
しょうか……いや、いまさら善人ぶったって」

ヘンリーは背筋をぐいと伸ばした。

「お判りでしょう。あの時、私も悪魔に魂を売り渡した  
のです。わずかの間、私はあなたになったのです。」

人間とは、なんとひ弱で、だらしのない存在でしょう。

私だけは違う、私には世の正義のため、あなたをこの世  
から抹殺する権利と義務があると思っていたのに……」

「……もういい。君の言いたいことはよく判った。だか  
ら寝なさい。交代の時間だ」

ノーマンは降りてくると、ヘンリーからライフルを受  
け取り、彼を樹上へと追い立てた。

「約束どおり一時間したらちゃんと起こしてください」

「了解だ。早く寝ろ寝ろ」

ヘンリーの心に、ノーマンのつつけんどんな言葉が、  
ひどく温かく響いた。ヘンリーは涙の跡をぬぐうと、す  
ぐに眠りに落ちていった。

ヘンリーは懐かしい風景の中にいた。薄曇りの空から  
申し訳なさそうに注がれる陽光。霧の中にぼうつと浮か  
び上がる崩れた煉瓦塀。暗い路地。饅すえたにおいの漂う  
空気。間違いなく彼の生まれ育ったイーストエンドであ  
る。彼は小さな体で、石畳の道の上を軽やかに駆け抜け

ていった。

「あら、おかえり」

家の前まで来ると、通りに面した窓越しに母親が声をかけてきた。彼女はいつも窓辺に置いたミシンを踏んでおり、道行く人に愛想よく声をかけては、仕事をしながら世間話に興じた。どこからかいいにおいが漂ってくる。

「父さんも、ほら、帰ってきたわ」

ヘンリーは往來に目をやった。するといつものように足の裏を引きずるようにして歩いてくる父親の姿を発見した。彼は右手に持ったトレードマークの酒瓶をわずかに上げてみせた。

「早く手を洗つといで」

母親に促されて、ヘンリーは家の中に駆け込んだ。そして手を洗うより前に、台所の戸口に立っていた。先ほどから彼の鼻をくすぐっていたにおい、その源がここだ。

「おかえり、未来の絵描きさん」

姉のメアリーは満面の笑顔で出迎えると、ヘンリーの額にキスをした。

「晩ご飯までもうちよつとだから、待っててね」

ヘンリーは、うんと頷いて、姉の後ろにある鍋を見た。ヘンリーの好物であり、近所でも評判の「メアリーのシチュー」である。かぐわしいにおいと共に、ぐつぐつと鳴る音がヘンリーの空腹をさらに刺激する。

「あらら、ゴミ箱がいつぱい。ヘンリー、お願いしている？」

オツケーと応え、ヘンリーは生ゴミが山のように入った箱を抱えて、勝手口から裏の路地に出た。

ゴミ箱の中身を、大きな箱の中にひっくり返していると、鼻が妙にひくついた。ヘンリーは空を見上げた。

雲がさつきより拡がっている。雨が来そうだ……。

「——ンス、おい、起きろ」

ふくらはぎをライフルの筒先で叩かれて、ヘンリーは目を覚ました。周囲はすでに明るくなっている。

——しまった。寝過ごした。

ヘンリーはあわてて体を起こした。

「どうして起こしてくれなかったんですか？」

ヘンリーが非難すると、

「寝不足でジャングルを踏破しようなんて、アマゾンになめるんじゃない。それより空を見ってみる」

ヘンリーは言い返す言葉もないまま、空に目をやった。

「……雲だ」

昨日は真っ青だった空に、どす黒い雲がいくつも浮かんでいる。青空はもうほとんど残っていない。

「空気が湿ってきた。ヤバイ、またひと雨、来そうだ」  
ノーマンは空に唾を吐くようにそう言った。ヘンリー

も頷くと顔をしかめた。

「今度また嵐に見舞われたら――」。

川は再び増水し、濁流は上流の座礁船を動かすかもしれない。そうなれば下流にいる我々の命は風前の灯火だ。

「悠長なことはしておれん。ハンス、あれを見ろ」

ノーマンは北の対岸の上空を指さした。

「煙が見えるか？」

「煙ですって？」

ヘンリーは体をひねると、垂れ下がる枝葉の隙間から、ジャングルと空の境界線をなぞるように目を走らせた。

「ああっ」

灰色をした雲状のものが密林の間から立ちのぼっている。煙というよりは狼煙のろしのような頼りないものだが、明らかに人間がいる証あかしだ。

「搜索隊でしょうか？」

期待を込めて訊ねると、

「そう願いたいものだ。とにかく君が向かうべき方角は決まった」

そう言うと、ノーマンはライフル銃の点検を始めた。

ヘンリーは自分が泳ぎ渡る役目を受け入れた。これ以上議論している余裕はない。天候はますます悪くなりつつある。急ぎ川を横切り、あの煙の下までたどりつかねばならないのだ。無事にジャングルを抜けることができ

るだろうか。いや、この川を渡ることだって命がけなのだ。

「すぐ出発してくれ。ワニどもは今、反対側の岸边に集まっている。おあつらえ向きだ」

ノーマンがせき立てる。

「判りました。私が帰ってくるまで、無事でいてくださ  
いよ」

「頼むぞ、こんなところで見捨てないでくれ。この足では泳ぐわけにもいかんしな」

ヘンリーはノーマンの言葉に不安の色を読みとった。ワニの動静をうかがう目もどこかそわそわとしている。強気の彼にしてみれば、らしくないふるまいだが、これまで片時も離れないボディガードがいて、遭難後も私が付いていた。その彼が初めて一人つきりになるのだ。

ヘンリーだって無事に捜索隊と合流できる保証はない。二人のどちらが安全ともいえないのだが、待つ身のつらさというのものもある……。

ヘンリーは思わず苦笑した。仇に同情するなんて、ほとほと自分は甘い男だと。彼は頸に巻いている銀のペンダントをはずすと、ノーマンに差し出した。

「これを」

「……何の真似だね。大切なものじゃないのか？」

「姉の形見です。私の命です。これを預かっていてくだ

さい。私は捜索隊を連れて、きつと戻ってきますから」  
「——判った」

ノーマンは受け取ったペンダントを自分の頸にかけた。それを見て取ると、ヘンリーは樹の股から降りた。

「水しぶきを上げるな。ピラニアが寄ってくる危険がある。平泳ぎで行け」

ノーマンは真剣な口調でアドバイスした。

「了解」

応えると、ヘンリーは静かに水の中へ体を沈めた。

周囲は依然、シーンと静まりかえっている。ヘンリーはその静けさがやけに気になった。首を巡らせると対岸では十頭ほどのワニがじつとしている。ライフル銃の威力が身にしみたのだろうか。

ヘンリーはゆっくりと両腕を前に伸ばすと、泳ぎ始めた。水を撥ねないよう十分に注意して。

川の流れは緩くなったとはいえ、まだまだ油断できない。うっかりすると腕をとられて仰向けになりそうだ。

彼は一応、流れを考慮して、上流を斜めに突っ切る方向に進み始めた。だが川の力は予想外に大きかった。流されまいと焦って力りきむと、手が水しぶきを上げてしまう。

あわてるな。自分に強く言い聞かせた。

水に入ってしまうと距離感が判らなくなった。対岸が近づいているのかどうか判然としない。ノーマンのおか

げで睡眠はとれたものの、極限までの空腹感、なかなかヘンリーに力を与えてくれなかった。

それでも彼は必死で手足を動かし続ける。

ポツリ。目の中に水滴が飛び込んできた。あたりの水面もポツリポツリと音を立て始めた。とうとう降り出した。急がなければ……。

その時――。

ダーンという銃声音が川面に轟いた。

ヘンリーの体に緊張感が走った。やはりワニどもが追いかけてきたのか。彼は恐怖に顔を痙攣させて、背後を見た。

ノーマンが樹上でライフルを構えているのが目に入った。意外なほどその姿は近くにあった。

ライフル銃が再び火を噴いた。銃口はワニのひしめく方角ではなく、ヘンリーの行く手に向けられていた。

「ハンス、戻ってこい！」

ノーマンが大声で呼んでいる。さらに三発、四発と銃弾が発射される。

いったい何だ？ 何が現れた？

ヘンリーは恐怖に体をすくませながらも、確かめずにはいられず、立ち泳ぎで前方の水面に目を凝らした。

水没しきれないまま、流れに揺れている樹木。

崩れた土地の名残をとどめる岩石。

あちこちに引つかかっている船の破片。

——と、岩か何かだろうと思っていたものが、ふいに動き出した。ワニだ！

うかつだった。四、五匹はいる。隠れていたのだ。奴らはこちらが動き出すのを、じっと待っていたのだ。

それにしてもおかしい。まるで軍隊のような統制のとれた動きはいったいどういうわけだ。

「……！」

ヘンリーはようやく思い至った。と同時に、生き肝を抜かれたように体から力の抜けていくのを感じた。

水面に浮上したワニたち、いや正確に言えばそのワニは、たった一匹だった。一匹なのに体長は普通の二倍はある！ 普通の奴が巡洋艦なら、こいつは大型戦艦だ！  
こんな奴がいたなんて……。

巨大ワニはじよじよに距離を詰めてきた。その偉容は見るものを圧倒せずにはいない。他のワニどもはこいつを恐れて遠巻きにしていたのか！

グアツ。巨大ワニはまるで吠えるような声をあげると、その顎を開いて、並んだ歯を自慢げに披露した。

——こいつに喰われる、この歯に引き裂かれて。  
ヘンリーは半ば意識を喪失した。

『人間とは、なんとひ弱で、だらしない存在でしょう』  
昨夜、彼自身が口にした言葉。それが頭の中で教会の

鐘のように鳴り響いている。何回も何回も。そのうちに残っていた意識も深い霧に包まれ……。

チューーン。

耳のそばを銃弾がかすめた。

グオオオオオツ。

突然、耳を圧するような咆吼が空気を震わせ、ヘンリーを包んでいた霧を吹き払った。ノーマンの撃った弾丸はどこか急所に当たったのだろう、それまで王のように振る舞っていた巨大ワニは、その貴族然とした雰囲気をかたぐり捨て、持って生まれた<sup>どうもう</sup>獰猛さを露わにした。

「ヘンリー！ 早く逃げろ！」

ノーマンの声でスイッチが入ったように、ヘンリーはくるりと向きを変え、抜き手を切って泳ぎ始めた。

銃声が立て続けに起こり、巨大ワニはさらに凶暴化し、蹴立てる波がヘンリーの泳ぎを妨げた。

それでもしゃにむにがんばり通したおかげで、どうかパンナムの幹にたどりつくことができた。

しかし巨大爬虫類は攻撃の手をゆるめなかった。奴はヘンリー目かけ、一直線につつこんできた。

「あぶない！」

ズンツ。

巨大ワニはその鼻面を幹の中ほどに激突させた。ヘンリーは跳ね飛ばされまいと渾身の力で樹に食らいついて

いた。せり上がった水が、まるで津波のように彼の体に襲いかかる。ノーマンの安否が気になりながらも、目を開くことができない。

銃声が聞こえる。ああまだ無事だ。しかしいつまでもつだらうか。絶体絶命だ――。

ヘンリーは少しでも水の上に出ようと、両手両足ではさんだ樹の幹を昇り始めた。彼にはそうするより他に何も思いつかなかった。

雨がヘンリーの顔を濡らす。それでも構わず大きな眼を開けて怒鳴った。

「ノーマン、逃げろー！」

その時だった。ヘンリーの視界を右から左へと横切ったものがあつた。それも恐ろしく速いスピードで。

今度は何が現れた？

視線は睨みつけるように、鈍く光るその物体を追った。

「へり……？」

いきなり耳に回転翼の音が飛び込んできた。

「ヘリコプターだ！ 社長、救助隊です！」

まぎれもなく飛行物体はヘリコプターだった。

へりは高度を上げると、森林の上を迂回した。そして川の上流に出たかと思うと、低い高度でスピードを下げながら、巨大ワニへ突っ込んでいった。

チカチカと窓のあたりが明滅し、銃声が聞こえた。巨

大ワニはたまらず逃げ始めた。さらに追い打ちをかけるヘリは銃撃を続け、とうとう撃退に成功した。巨大ワニは恐ろしい声をあげながら視界の外へと消えていった。ヘンリーにとって、その一部始終はまるで映画を観ているようだった。

やがてヘリが戻ってくると、扉が開かれ、誰かが大声で叫んだ。

「ヘンリー！」

意外なことに、それは女性の声だった。

「……レニーか？」

「よかった、無事で！」

ヘンリーはまさかという面持ちで、頭上をホバリングしているヘリを見上げた。

扉を開けて、乗り出すように両手を広げているのは、まさしく彼の知る女性の姿だった。

「ヘンリー！」

ノーマンが樹の上から呼びかけた。

「あれは君の知り合いか？」

「ええ、妻なんです」

「なんと……」

ヘリは開いた扉から縄梯子を垂らし始めた。二人を吊り上げようという寸法らしい。

ノーマンは陣取っていた樹の股を降りると、幹を伝っ

て水面まで降りてきた。樹上にいると茂った葉が邪魔して梯子をつかめないからだ。

「ハハハ、朴念仁と言われた君に妻がいたとはな。まあ五年も経つものだからあり得ない話じゃないか」

巨大ワニが消え、救援が来たことで緊張が解けたらしく、ノーマンは軽い調子で話しかけてきた。それに対して、ヘンリーは真顔になって、

「彼女の名は、レニー・マクファーソン。しかし結婚前の名前は——レニー・モース」

「モース？ どこかで聞いたような気が……」

「あるはずですよ。父親はあのフレッド・モースです」  
ノーマンは目を剥いた。

「あの……って、エレノアと私を狙撃した——」

「そうです。犯人の娘です」

ノーマンは、無言でへりを見上げた。

ヘンリーは無理に明るい声で説明した。

「事件の前、レニーは全寮制の美術学校に在籍する画学生でした。それがあなたの差し金で兄と母親を亡くし、最後には父親までも。以後、彼女は学校を自主退学して、フレッドの残したレストランを一人で守ってきました。守るとひと口で言っても、その苦労は並大抵ではなかったようですが。」

私はそんなレニーが哀れでなりませんでした。だから

こつそり義援金を送ったり、ときどき様子を見に店を訪れるようになったのです。

何度目かに話す機会があつて、私はレニーを美術館に誘いました。……思えば私にとって、あれが生まれて初めてデートでした。そして——まだ昨年のことですよ、私たちが結婚したのは」

「そうだったのか」

ノーマンは濡れた白髪を手ぐしでかき上げた。

「店は繁盛してるのかい？」

「ええ、おかげさまで……と言つては皮肉になりますね。彼女のがんばりが実つて、今じゃ大々繁盛、貧乏暇なしといったところですよ」

ヘンリーは照れながら応えようと、目の高さまで降りてきた梯子をつかむべく、体を乗り出した。

「貧乏つて……私の会社があるじゃないか。君が私のあとを継いで、社長に納まったものと思つていたんだがね」

「なにをおっしゃるやら、社長」

「私はもう社長ではない。会社を捨てたのだからな」

「いいえ、まだ社長です。ただし資産はありませんが」

「………？」

「あなたあつてのグリーンウッドですよ。あなたのいなくなつたグリーンウッドを誰が支えられるとお思いです

か？ 結局、会社は解体され、おのおの部門ごとに身売りされました。ただし名前だけは残っています。資産整理のための事務所一つっきりの会社として」

「なるほど納得したよ。我が父が亡くなったことだけは、タイムが新聞の切れ端を持ってきてくれたので知ることができたが、それ以外はまったく外界の接触を断っていたので、会社のその後についてはまったく知らなかった。ニュースもほとんど耳にしないからね」

ノーマンはもの柔らかな口調でそう言った。

ヘンリーは頷いた。そして梯子を捕らえようと、右腕を伸ばした。先ほどからの雨に加えて風が少し出てきたので、左右に揺れる梯子は、なかなかつかまらない。

目で梯子を追いながら、ヘンリーは話し続ける。

「職を失った私は、彼女の店でいっしょに切り盛りする手伝いを始めたのです。私の料理の腕もまんざらではないんですよ。今年だって、私のアイデアを人気メニューに加えることができましたしね」

「うれしそうだな」

聞いていたノーマンは、じっさい羨ましがな声だった。「はい。充実しています。ただ、あなたを追うことだけはやめませんでした。」

私はすべてをレニーに話しました。そしてレニーは私の決意を応援してはくれましたが、そのじつ反対してい

ました」

「なぜ？」

「がむしゃらにあなたを捜して世界中を飛び回る私を心配したのでしよう。彼女はこう言ったのです。私も恨みは消えないが、恨みだけを抱いて生きていけば、私たちの人生も呪われたものになってしまう、と」

「……」

「費用だってバカになりませんでした。なにしろ世界中が捜査範囲でしたからね。グリーンウッド時代の貯金もほとんど残っていません」

ヘンリーはようやく梯子の先端をつかんだ。

「ハンス——いや、ヘンリー。君の奥さんはよく我々を発見することができたもんだ。君は彼女もマナウスまで連れてきていたのか？」

「とんでもない。彼女はいつもニューヨークですよ。」

私は捜索に出向いたとき、毎日一回は必ず連絡を入れることにしているのです。最後に電話したのはマナウスのホテルから、あなたに会う前日でした。

あれから四日。おそらく察しのついた彼女が動いたのでしょう。捜索隊のヘリに乗っているのも、そんな理由からだと思います。反対はしていても、あなたに対する思いは同じですから」

「……済まない。大変な苦勞をかけさせたな」

ノーマンは胸元を押さえながら、頭こっぺを垂れた。その姿は、教会で懺悔を乞う、只のひとりの人間だった。

ヘンリーはその背中に語りかけた。

「それも今日で終わりです。社長、どうか妻に会ってやってください」

ようやく梯子をつかんだヘンリーは、ノーマンの前に差し出した。ノーマンは受け取ろうとしながら、

「そうさせてもらおう。そして心からのお詫びを……」

そこまでしゃべった時、別の方角から新たなヘリコプターが爆音を響かせて現れた。

「ほう。もう一機、来てくれたぞ」

機体を漆黒に塗り潰されたそのへりは、二人のいる場所にまっすぐ接近すると、異常ともいえるスピードで飛び過ぎた。ヘンリーは風圧で川面に投げ出されそうになった。そのときになってようやく気がついた。水の土色が今朝より濃くなっており、水量も増えていることに。上流ではとんでもない豪雨が降っているのか。

「ら、乱暴な奴ですね。梯子を離してしまいましたよ」

ヘンリーは軽口のもりで言った。同意を求めるつもりでノーマンの顔を見ると、彼の顔色から血の気が失せていることに気づいた。

「どうしたんですか？」

「……奴らだ」

「奴ら？」

「“組織”の連中だ！ おそらく君が発見されたとの一報をどこかで傍受したのだろう」

「まさか——こんなに早く？」

黒いヘリは上空でUターンすると、再び高度を下げて迫ってきた。そしてヘリの下部にしつらえられたマシンガンが、二人をねらって火を噴いた。

「うわっ！」

「がはっ！」

弾着が川面に水柱を立てる。

二人は樹の幹を盾に、間一髪で攻撃をかわした。

黒ヘリは座礁した船の上を悠々と飛んでいく。

レニーを乗せた搜索隊のヘリは、梯子を伸ばしたまま、空高く飛び去っていった。

「ゴホゴホッ……社長、ライフルを！」

「ダメだ」

「どうして？」

「巨大ワニで、弾丸を撃ち尽くした！」

ヘンリーは唇をかみながら、樹にもたれかかった。するとメキメキメキと音を立て、唯一の命綱であったパンナムの樹が、真ん中からぽつきりと折れてしまった。

ヘリは背後の雨雲に溶け入りそうな黒い機体を反転させた。

「また来るぞ、くそつ、もう隠れるところがない！」

「——社長、あれは誰でしょう？」

「なに？」

ヘンリーが指さしたのは、高度を下げつつある黒ヘリの手前、座礁船の傾いたデッキの上だった。のそりと人影らしきものが現れたのである。

「あれは——」

「もしや——」

現れた大男は、空に向かって吠えた。距離はかなりあるのに、声の一端が二人の耳に届いた。

「フランクは声が出せたのですか？」

「そんなはずはない」

大男はフランクだった。しかし四日間どうやって……。

「生きていたのか」

「でも彼は大怪我をしているんじゃない——」

フランクはもう一度吠えた。その時ようやく気がついた。彼はただやみくもに吠えているのではない。太い鎖を両手でつかみ、力一杯引き上げようとしていたのだ。

「彼は何を」

「黒ヘリが来る！」

“組織”のヘリコプターは、今まさに座礁船の上を、フランクの頭上を通り過ぎようとしていた。

「……………！」

思わぬ光景がそこに展開した。

それは一瞬の出来事だった。

フランクがあらん限りのパワーで引っ張り上げたものが、宙に躍り上がったのだ。

錨いかりだった。

本来なら停泊時に水底に落とされて役割を果たす巨大な重りが、空中に放りあげられたのだ。

重さにして一トンはあるのでは……という疑問は、フランクの行動を前にして意味をなさない。

そして——！

空中の錨は、黒へりと交錯した。

錨はへりの前部窓に、ものの見事に突っ込み、ぐしゃりと潰れたへりは、錨と船をつなぐ鎖の重みに引きずられるように、川の上へと墜落した。

あまりの光景に、ヘンリーもノーマンもただただ息を飲むばかりだった。

勢いをつけて急降下してきたへりを、錨は空中で係留し、叩き落としたのだ。乗っていた狙撃手たちは生きてはいまい。

二人は座礁船の上のフランクを見た。彼の眼にヘンリーやノーマンが映っているのだろうか。フランクは右手を大きく回したかと思うと、そのままデッキの上に倒れた。

「バカな。なんて無茶なことを」

ノーマンが涙まじりの声で叫んだ。ヘンリーも震える拳を握りしめ、フランクのために祈った。彼にも黒ヘリが“組織”の手のものと気づいたのだろう。どこか舷側の窓からノーマンらの危難を知り、重傷の体をおして、あんな無謀な手段に出たのだ。座礁船の影に消えたフランク——その幻影に、二人は悄然と頭を下げずにはいられなかった。

タイム同様、フランクもボディガードとしての任務を最後まで全うしたのだ。

回転翼の音がした。捜索隊のヘリが戻ってきたのだ。

「社長、さあ参りましょう」

「ああ……。だがその前に言っておこう。私はもう“社長”ではない。守ってくれる者をなくした一人の男だ」  
落ちたヘリを見つめたまま、ノーマンは言った。

「判りました。それでは、ノーマン。行きますよ」

頭上に静止したヘリは、再びスルスルと梯子を伸ばしてきた。今度はヘンリーもうまくつかまえることができ  
た。

「さあノーマン、昇って」

言い切らないうちに、ヘンリーの背中がドンと押され、ヘンリーは梯子の最下段につかまったまま、空中に放り出された。

「な、なにするんです！」

「早く逃げろ！」

ノーマンの鬼気迫る声が背後から浴びせかけられた。ヘンリーは聞いた。極めて重いものが断末魔のような音をたてるのを。

そして見た。楔くさびのように川の真ん中に打ち込まれていた座礁船が、見る見る動き出したのだ。

錨いかりに落とされた黒ヘリが、かろうじて止まっていた船を引きずったのか。もちろん今朝からの川の増水とも無縁ではないだろう。

座礁船は自分の重みに耐えきれず、脇腹の裂け目を押し広げながら、なおも前進するのをやめようとしなない。

「レニー、もっと下げてくれ！」

強さを増した風雨がヘリのコントロールを奪い、梯子が激しく左右に揺れる。

そうしているうちにも、船は墜落した黒ヘリを飲み込み、さらに激しく水を蹴散らしながら迫ってくる。

ヘンリーはつかまっている梯子を腕の力だけで昇り、ようやく足を掛かると、

「ノーマン、早くつかまって！」

いつの間にかヘンリーは泣いていた。泣きながらも、あらん限りの声で呼びかけていた。

「——さらばだ」

ヘンリーの耳を聳<sup>ろう</sup>していたあらゆる騒音が消えた。  
世界には彼とノーマンしかいなかった。

「ノーマン！」

雨水と涙でぐしょぐしょになった眼に映ったノーマンは、この上もなく豊かな表情で微笑んでいた。

独裁的な経営者でもなく、残忍冷血な理想主義者でもない。およそ平凡な四十男がそこにいた。

「——どこかでまた逢おう！」

次の瞬間、ノーマンの姿はかき消すように見えなくなった。

ヘンリーの真下を、もはや残骸と化した船が、何もかも浚<sup>さら</sup>っていった。

聴力の戻ったヘンリーは、何度もノーマンの名を呼んだが、勢いを増す風雨の前には、小鳥の囁きに等しかった。

## エピローグ

翌日、天気は見違えるような快晴となった。

上流に降り注いだ豪雨は、新たな濁流となって押し寄せ、アツという間に川はその様相を変えた。

この年は特に降雨量が多かったため、人間に対する被害も大きかったのだが、なかでもアマゾナス号の転覆事故は最大の事件だった。乗り合わせた人間で生還したのは、たった一名。半数は行方不明で、残り半数の遺体は、下流で次々に発見された。

ノーマン・グリーンウッド、そしてフランクとティムの遺体も三日後に発見された。ひどく傷ついていたが、唯一人の生還者ヘンリー・マクファーンソンによって確認され、彼によって盛大な葬儀が営まれたのち、三人が五年間暮らしたアマゾンの川面に散骨された。

船会社と遺族たちによって、マナウスの高台に合同慰霊碑が作られたが、そこにはノーマン・グリーンウッドの名前とともに、フランク、ティムの名前がはっきりと刻まれていた。

事故のあと、ヘンリーは体調不良で入院を余儀なくされたが、絶対安静というほどでもなく、その間に押し寄せた数多くのマスコミの取材を受けた。

彼は亡き船長の家族をおもんばかって、事故の原因について、振る舞い酒にはいっさい触れず、不運な座礁事故であると明言した。彼だけが助かったことについては、座礁船から流れてきた飲食物を口にしたおかげであると語った。なぜこの時期にアマゾンを訪れたのかという質問には、仕事上、新たな食材を求めると適当に答え、かつての上司ノーマンが同乗していたことについては、偶然であると突っぱねた。正体不明の黒いヘリコプターが飛来したとの噂についてもきっぱり否定した。この点について、捜索隊もその通りであると答えたという。

妻レニーの献身的な看護のかいあって、十日後にヘンリーは退院することができた。帰国する前に彼は慰霊碑を訪れ、しばし黙祷を捧げたと、地元の新聞が一面で報道した。

報道陣による洗礼は、ニューヨークでも浴びることになった。密林で遭難し、唯一人の生き残りというニュースはここでもセンセーショナルに伝えられており、特に「巨大ワニとの格闘」については映画化の話も出ているとレポーターから聞かされ、ヘンリーはいささか驚いた。

グラランド・セントラル駅のホームに降り立ったとき、

ヘンリーはさすがにホツとした。我が街に帰ってきたという印象が彼の緊張をようやく解いたのだ。しかしそれもコンコースに上がるまでだった。

コンコースに出たヘンリーとレニーは、沸き返らんばかりの歓声に迎えられた。しかし今度はマスコミではなく、地元の一般人ばかりだった。

「おかえり、ヘンリー、また頼むぜ！」

「レニー、これからもよろしくな！」

みんな二人のレストランの常連客だった。彼らは二人を囲んでねぎらいの言葉を口々に述べると、一団となってレストランへと、すなわち二人の家のある駅の裏通りへと練り歩いた。

ヘンリーは心からありがたいと感じた。

十八歳で渡米し、十一年間、生き馬の目を抜く流通業界の最先端で戦ってきた。その間、友人も恋人も作らず、ひたすら孤独に徹し、復讐の二文字だけを睨んで生きてきた。

五年前、レニーと出逢い、それまでの身分を捨てた。

収入は数十分の一に激減した。

新しい仕事は、早朝から深更にまで及ぶハードワーク。それなのに、この充実感はどうだ。

今や常連客も増え、店を広げる話も出ている。

……あの頃、自分を突き動かす原動力は、復讐しかな

かった。だが今は違う。今は何かと問われれば“人”と答えるだろう。妻レニーであり、温かい常連客たちであり、そしてこの数年間にさまざまな局面で支えてくれた友人たち。

自分に対する期待。自分を必要としてくれる気持ち。それを感じるとき、生きていることを実感する。

父さんや母さん、姉さんも、今の自分を見たらきつとほめてくれるだろう。よくがんばったと。

「そら、我が家にご到着うー」

常連客の一人が調子つばずれな声をあげた。すると別の客が酒臭い息をヘンリーに吐きかけながら言った。

「明日からでいいから店を開けてくれるかい？ オレア、

“メアリーのシチュー”がないと、さみしくて酒ばっかり呑んじまうんだ。頼むぜ、大将！」

ヘンリーはOKとばかり、ウインクして見せた。

“メアリーのシチュー”はヘンリー発案によるメニューだ。姉のメアリーがよく作ってくれた味を、ヘンリーは研究を重ねて、ようやく味と食感を再現することができたのだ。“メアリーのシチュー”はすぐに人気メニューになった。鉄道をいくつも乗り継いで食べに来てくれるお客までいる。だからレストランの周辺には、いつもシチューのにおいが漂っている。それはヘンリーに生まれ育った街を思い出させた。ロンドン、イーストエンド。

そして今や第二の故郷になったこの街、ニューヨーク、ミッドタウン・イースト。

レニーにだけは、アマゾンであったことをすべて話した。もちろんノーマンと交わした会話も。

「彼は、君に心からのお詫びを述べたいと言ったよ」  
そう言うと、レニーは黙って頷いただけだった。

あの日ノーマンは、ヘンリー発見の報を傍受されたために、黒ヘリの刺客が飛んできたのだと言った。だとすると“組織”はヘンリーがノーマンを追っていることをあらかじめ知っていたのだ。知っていてヘンリーを泳がせながら監視していた。その点で彼は“組織”の片棒を担いでいたわけか。

連絡を受けてブラジルに急行したときも尾行されたりうし、マナウスの港から船に駆け込み乗船したところまでは把握していたろう。この時、“組織”がノーマンの同乗までは確認していなかったと推測される。でなければ、支流に入ったどこかで船ごと攻撃されたはずだ。ただフランクかティムの姿は目撃された。だからきつと先回りして彼らの下船する場所を確認したら、急襲し一網打尽にするつもりだった……。これらはあくまでヘンリーの推測である。

じっさい、ヘンリーが発見されたと知るや、あたふた

と駆けつけた黒いヘリコプター。捜索隊の無線を盗聴しながら、付近を飛んでいたのに違いない。いつでもノーマンを仕留められるよう万全の体制を敷いて。

結果、ヘリは落とされたがノーマンも死んだ。“組織”にとって、めでたしめでたしである。ヘンリーもお役御免で、監視も解かれたことだろう。なにしろノーマン捜しに血道を上げていたヘンリーが、流れ着いた屍体を彼であると認めたのだ。これ以上の証拠はあるまい。“組織”にとって秘密を知るノーマンや فرانク、ティムが死ねばそれでいいのである。

ヘンリーは三人の遺骨をそのまま埋葬することはせず、散骨という手段をとった。万が一、“組織”が埋めた墓をあばき、DNA鑑定などという手を使ったりしたら、非常にマズいからである。

フランクとティムの遺体は、正真正銘の本人たちだったが、ノーマンについてはまったくの別人だった。ヘンリーはあえてその屍体をノーマンであると断言した。

彼の最期を思い出せば、生きている可能性などあり得ない。誰にも気づかれなのまま、密林の川べりで朽ち果てたか、はたまた、ワニの餌になってしまったか。

それでも——とヘンリーは夢想する。それでも彼が生きていたとしたら、それはそれでいいのだ、と。ようやく彼はすべてから自由になったのだし。

またたくまに八年が過ぎた。

四十二歳になったヘンリーは、レニーとの間に二人の子宝を得、相変わらず仕事に精を出す毎日だった。

店名である『フレッドの店』も変わらない。場所も同じく駅の裏通りだ。しかしグラランド・セントラル駅の大改修に合わせて、初めて店を拡張した。フロア面積は三倍になり、店員やコックも増えた。今や堂々たる風格のレストランである。にもかかわらず、客層にたいした変化はなかった。理由はヘンリーの意固地さにある。グラランド・セントラル駅が雨漏りを直し、コンコースの天井の汚れもきれいに拭き取ったというのに、『フレッドの店』はいつまで経ってもあか抜けない。ヘンリーが、低所得者層の常連客が入りにくい店にはしたくないとゴネるからだ。あくまで“大衆食堂”が彼のモットーなのである。ただ最近ではニューヨークの嗜好にも変化が起こっているようで、不似合いな若者の姿もちらほら見かけるようになった。彼らにも“メアリーのシチュー”は評判なのだそうである。

ある日、ヘンリーはイギリスから手紙を受け取った。

差出人はイギリス警視庁である。中の手紙を読んで、ヘンリーは仰天した。二体の白骨が先日、ロンドン郊外の

山中から発見されたが、ヘンリーの両親ではないかというのだ。それでもしヘンリーに渡英してもらえたらDNA鑑定が可能なのだが、と書かれている。

ヘンリーは半信半疑だった。レニーに相談すると、「行ってみましょうよ。あなたは一度も国に帰っていないだし、お姉さんのお墓参りだってできるじゃない。それに私もあなたの生まれた国を見てみたいわ」

即決だった。

一週間後、店を若いチーフに任せたヘンリーとレニーは二人の子供を連れて、空港から一路ロンドン目指して飛び立った。

フライト時間はたった八時間である。二十四年前、何日もかけて密航したヘンリーにとっては感慨ひとしおであった。

ロンドンに到着すると、彼は一人で警視庁におもむいた。担当の人間に会うと、すぐに研究棟の方に連れて行かれ、血液などを採取された。厳密な結果が出るには数日を要するという。

ヘンリーは妻子を連れてイーストエンドに行ってみた。さすがに昔の面影はどこにもなく、シヨツピングモールが軒を連ねていた。

彼はだいたいの見当をつけて歩き、有名ハンバーガーシヨツプの軒先に立ち止まった。

「ここだ……」

ヘンリーは呟いた。

「あなたのお家のあった場所？」

レニーが問いかける。

「そう。あの辺に窓があつて、母さんがいつもミシンを踏んでいた」

ヘンリーは耳をそばだてるようにして、しばらくその場に立ちつくしていた。そのうち退屈してきたのか、幼い次男のフレッドがヘンリーの足に絡みついてきた。

「判った、判った。そろそろ行こうか」

そう言って小さなフレッドのご機嫌をとると、お澄ましの長女メアリーの腕をとり、レニーを促してその場を離れた。

「結果が出ました。あなたのご両親に相違ありません」

ヘンリーは担当医師の説明に、軽い眩暈を覚えた。

「どうぞ、こちらへお越しく下さい」

医師はヘンリーを別室に連れて行った。そこには二つの箱が置かれてあり、被せられた布をめくると、その下には白骨が入っていた。

ふいにヘンリーの眼に涙があふれ出した。こらえきれず彼は床に膝をついた。

「父さん……母さん……やっと会えたね」

医師は何も言わず、じつとそばに立っていた。

姉の墓は、当局の手によって市営墓地の中に作られていた。父母の遺骨は、姉の隣に納めることにした。

三つの墓の前に、あらためて親子四人で並ぶと、ヘンリーは何かしら深い安堵感に包まれた。

ニューヨークへ帰ろうという前日、再び警察を訪れ、担当医師らに礼を述べた。

「ところで父と母は、どなたが発見してくれたのでしょうか？」

ヘンリーは捜査に当たった警部補に訊ねた。

「あの山の所有者が雇ってる労働者たちだよ。新しい畑を作ろうと耕していたら偶然出てきたんだそうです」

「良かったら、所有者の方の連絡先を教えてくださいませんか？」

住所と電話番号を聞き取ったヘンリーは、バッキンガム宮殿を見に行きたいというレニーと子供を残し、タクシーに乗って郊外の農場へと向かった。

農場主は腹の突き出た、気のいい五十男だった。彼はわざわざ自分の車にヘンリーを乗せて、発見場所まで連れていってくれた。

そこは山道をかなり分け入ったところで、森林の中に

ぼつかりと平坦な土地が開けている、耕地としては悪くない場所だった。

車を降りると、農場主はヘンリーを案内して、藪の中に入っていた。

「見つけたのは、まったくの偶然でした。三人の農夫を耕地に行かせて、私は車の中で何を植えようか検討していました。すると一人が大慌てで駈けてきたんです。骨が出た！ 奴はそう叫んだじゃありませんか。驚いて見に行ったら——ってわけなんです」

「そうでしたか……。知らせてくださってありがとうございます  
ございます」

「いやいや、礼なら、アイツに言ってやってください。  
発見したのはあの男なんです。おーい！」

農場主は、だみ声を張り上げて、一人の農夫を呼んだ。  
もうかなり年輩らしく、まばらな髪の毛で、しかも片足を引きずるようにしていた。

「コイツですよ、旦那」

農場主はにこやかに紹介すると、彼に向かって、

「おい、旦那を骨の出た場所に連れてってさしあげろ。  
もしかしたらまだ何か遺品が出てくるかもしれん」

そう言うのと農夫の尻を叩いた。農夫は腰をかがめて、  
ヘイと応えると、背中を向けて農地のはずれへと歩きだした。ヘンリーは農場主に頭を下げると、農夫のあとを

追った。

発見場所というのは、すぐ近くだった。それにしても周囲にはたくさん樹木が茂っていて見通しは悪く、これは確かに運がよかったなど、ヘンリーは強く思った。

「ここがす、旦那」

しゃがれ声の農夫の指し示すあたり、そこには深い穴がポツカリと口を開けていた。警察が掘り起こした跡に違いない。ヘンリーは片膝をついて、掘り返された土を手の平にのせた。

こんなところに長い間、眠っていたなんて。

「君、君が骨を発見してくれたんだってね。ありがとう。礼を言うよ」

穴の奥を見つめながら、ヘンリーは農夫に話しかけた。「とんでもございやせん。あつしも見つけた時や、おっかなびつくりでございまして」

農夫はそう応えた。

ヘンリーは顔を上げると、左右に目を走らせた。農場主は車に乗って待っていてくれており、周囲には他に誰もいなかった。

「——私に撃たれた足、いまも痛みますか？」  
ヘンリーはゆつくりと訊ねた。

返事はすぐに返ってきた。しかもその声は少しもしゃがれてはいなかった。

「君の方こそ、名物メニユーは増えたのかい？」  
ヘンリーは振り向かず言葉が続けた。

「父母の遺骨は、無事に姉と一緒に葬ることができました」

「それはなにより。苦勞して探した甲斐があつた」

「……ロンドンには、妻と二人の子を連れてきています。明日にはニューヨークに帰るつもりです。よかつたら、妻に会つてやつてくれませんか？」

「いや、私にはまだやらねばならないことがある。

——どこかでまた逢おう」

八年前に聞いたのと同じ台詞と同じ口調だった。

それつきり、農夫の声はしなくなった。

振り向くと、農夫のいたあたりに一本の樹が立っていた。樹は途中で二股に枝分かれしており、ヘンリーはその懐かしい形に思わず近寄った。

枝の先に、鈍く光るものが掛かっていた。ヘンリーにはそれが何なのか、すぐに判った。

それは姉の形見の、銀のペンダントだった。

《終わり》